

教育研究創発機構第5回公開研究会

苅谷 学校臨床センター長と機構の機構長を兼ねております、東京大学の苅谷と申します。今日は司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ致します。いつになく朝からの公開研究会で、これだけ熱気にあふれた会場がいっぱいというのは、恐らく機構の公開研究会として初めてだと思います。それだけ今日のテーマについて皆様方のご関心が高いんだと思いますけれども、今日は臨床センターでこれまでずっと続けておりました研究プロジェクトの一貫と致しまして、「塾から見た学校教育」という視点でお二人の先生に外部から来ていただきまして、そして、教育学研究科からお二人の先生にコメンテーターとして参加していただきまして、これから公開研究会を始めたいと思っております。

後程それぞれの方のご紹介はさせていただきますが、最初に今日のこの研究会がどういう研究プロジェクトの一貫として行われているのかということにつきまして、臨床センターの秋田喜代美先生のほうから簡単にお話をさせていただきたいと思ひます。

秋田 おはようございます。お越しくださいませありがとうございます。私ども学校臨床総合教育研究センターの方では、私と、恒吉僚子先生が、研究プロジェクトの責任者になりまして、学力を支える学習環境のサポートシステムをどのように作っていったらいいのかということについて「学習環境改善のための学校支援システムの比較調査及び開発研究」と題した研究を継続的に行っております。それは学校の授業や、それから学校全体の文化と同時に家庭の支援であり、また、地域の支援をどのように作っていくのが良いのかということの研究しております。

その一貫として、やはり今、子供たちが学ぶ場として学校だけの問題ではなくて、塾というものの役割を正面から、やはり塾の役割というのを論じる必要があるのではないか。特に週5日制になりましたり、それからそのコミュニティーというものに視点が当たれば当たるほど、そのコミュニティーの中にある教育リソースとしての塾がどのような役割を担ってくるのかというところを、今日、塾のお立場からお二人の方にお話を伺いたいというふうを考え、このシンポジウムを企画させていただきました。

荻谷先生や志水先生のご研究でも、教育資本において見えない格差というのが起こってきていることを指摘されておられます。そういう意味では、塾という所は教育資本を掛けられる子供がより多く行くようになっていくという実態はあると思います。その中で、どういう役割を今後塾が担っていくのか。また、むしろ塾から見ると日ごろ学校の中で見えない新たな視点として、どのようなものが見えてくるのかということについてお話をいただければと思っております。このようなことが企画趣旨で、今日2時間余り積極的な討論ができればと思っております。以上です。

荻谷 どうもありがとうございました。それでは早速お話をさせていただこうと思いますが、最初に今日の進め方について簡単にご紹介したいと思います。

最初に小宮山博仁先生からお話をいただきます。そして、その次に高濱正伸先生からお話をいただきます。それぞれ質疑応答の時間を最後に4、5分だけちょっと短く取りまして、トータルで大体お一人30分ぐらいでお話をさせていただこうと思っております。そして、お二人のお話が済んだ時点で休憩も挟まず、すぐに指定討論者であります教育学研究科の矢野眞和先生と市川伸一先生からそれぞれコメントをいただきます。そして、そのあとで残りの時間をフロアを交えてディスカッションの時間に充てたいと思っております。

当初の予定は12時ということで、実は、午後にもう一つのCOEのほうのシンポジウム、これは別の会場になりますが、そこで開くことになっておりますが、それが1時半からの予定ですので、多少もしよろしければ12時ぴったりに終わらずに15分とか20分ぐらいはちょっと延長する可能性があるということで、最初からお含みおきいただければと思います。

それでは早速ですが、初めに小宮山博仁先生からお話をいただきたいと思っております。小宮山先生は、もう皆さんもご承知の通り塾についてもたくさん著作を持っていらっしゃいますし、また、ご自身もそういう経験を持っていらっしゃる。そういう塾という視点から学校教育について、かなり俯瞰的にいろいろなご発言をしていただくには最もふさわしい方ではないかと思っております。それでは最初に小宮山先生のほうから。じゃ、このマイクでどうぞ。

矢野 僕はあとのほうがいい。

荻谷 あとがいい？分かりました、はい。じゃ、お願いします。

小宮山 おはようございます。小宮山です。30分というちょっと限られた時間でかなり早足になると思いますが、レジュメにそって、まず「塾から見た学校教育」というところから話を進めていきたいと思います。それから、「塾から見た学校教育」の資料もB4判片綴じで4枚添付してあります。こちらを随時参照しながら話を進めていきますので、よろしくお願い致します。

今日は塾関係の方も多いようですので、私の最初の話は「もうこんなこと当たり前だよ」と言われる方も多分いらっしゃると思います。ただ、塾のことを知らない方もけっこういらっしゃると思いますので、「塾はどのような経緯で現状にいたったか」という総括的な内容をお話ししていきたいと思います。

まず、レジュメを見ていただきます。1番から7番まであります。

最初は塾の分類について簡単にお話しします。実は、塾の種類によって教え方がいろいろ違います。ですから、塾とひとくくりにして、論じることはできません。特に、どのような授業をしているかは塾の種類によってかなり違ってくるので、はじめに塾の分類をさせていただきます。

それから、産業としての塾がどのようなかたちで日本に定着したか、を考えます。塾があることで有名な外国は韓国ですが、日本では、塾がどうして現在のように発達したのかということも含めて2番目にお話しします。

3番目は塾の授業です。ここにちょっと今日は力を入れたいと思うんですが、補習塾の授業の例と進学塾の授業の例を、具体的に資料を見ながらお話しします。

それから4番目として塾の役割です。これを簡単にお話しします。

それから5番目は、「塾は学力の向上に寄与しているか」というテーマです。これはかなり関

心がある方がいるテーマだと思いますが、ここでは私の持論をお話し致します。

それから6番と7番は、最後のまとめということで、「塾が学校に与える影響」と「塾と学校は共存できるか」という話で進めていきたいと思います。

まず、1番目から行きます。よく言われているのは進学塾、総合塾、補習塾、教育理念塾、これは救済塾とも言います。結城忠さんと言う方が、もう14、5年前ですか、「学習塾」と言う本をぎょうせいから出され、そこで初めて塾の分類を致しました。この分類は、それに大体基づいております。

進学塾というのは進学一本槍です。総合塾というのは進学と補習、両方を兼ね備えています。補習塾は主に補習専門の塾です。教育理念塾というのは、これは私が作った言葉ですけれども、「サポート塾」と言ってもかまいません。これには不登校の子どもたちを預かるとか、ボランティア的にやってるような塾も含めます。一応、こういった分類を頭に入れておいてください。

2番目に「産業としての塾の業態」についてお話しします。まず塾の歴史というのは、大体1960年代から始まったとするのが普通です。塾自体は、1950年代からあるのですが、戦後の高度経済成長と共に塾は発展してきたと言えます。高度経済成長というのは1959年から1974年まで15年の間のことで、日本が平均10パーセントの経済成長率を記録していた時代です。これはいまだにほかの世界ではない出来事です。そういう意味では日本は非常に珍しい国です。ちょうど高度経済成長の渦中であった1960年代を、私は第一次学習塾ブームと名付けております。

この時期は、どのような子どもたちが塾に行っていたかという、私も含めて団塊の世代です。まさにそこをターゲットにした塾が増えてきたのが、第一次ブームです。

第二次ブームは、私は1970年代だと思ってます。これは石油ショック以後です。高度経済成長が終わったあと、雨後の竹の子のように非常にたくさんの塾が設立されております。それは1999年のデータで分かります。このデータの売り上げ上位30社を調べると、そのうちの17社が1970年代に設立しているのです。まさに第二次ブームであった70年代に、今の大きな塾の半分以上が設立しているのです。このことから、第二次ブームが1970年代

というのは、まず動かしがたい事実だと思えます。

それからもう一つ、第三次ブームというのがあります。これは1980年代の末からバブルの前後です。このころ、また塾が増えてきています。第二次ブームの中心は高校受験でしたが、第三次ブームは、中学受験ブームと関係していることが特徴です。現在を、第四次ブームと位置付ける人もいますが、一応、私は第一、第二、第三というような分類をしております。

それから、塾の二極分化が、ここ10年非常に急速に進んでいます。私が調べた範囲では、1989年の時点では売り上げが50億を超えていた塾はわずか5社です。その当時の塾業界の売り上げは、大体1兆と言われております。そして、上位15社の寡占率を調べてみると、大体4パーセントから5パーセントの間です。

それが10年後、1999年には、50億以上の売り上げの塾は15社に増えています。そのなかには、100億以上の売り上げの塾も5社あります。その当時、1999年で1兆2千8百億という業界全体の売り上げ数字が出ておりますが、そのうち上位15社で約1,300億ぐらいの売り上げとなっています。寡占率を調べてみると、ほぼ10パーセントの寡占率になるのです。わずか10年で寡占率が倍になったということです。これは、業種としては非常に驚異的なことだと思えます。

ちなみに普通の小売業の寡占率というのは、2000年で約8パーセントから9パーセントの間です。それが塾の業界では、1999年には既に10パーセントを超えたということです。一番最近のデータは2002年しか持ってないのですが、これもほぼ10パーセントから11パーセントです。パーセンテージが1ポイント上がっているぐらいです。

この数字から見ると、世間では学力が二極分化していると言われておりますが、塾の業界も二極分化が進んでいることがわかります。大体、学習塾というのは、基本的には事業者数が4万5千から5万の間と言われております。それで、その中のわずか上位15社で10パーセントの売り上げを占めてしまうわけですから、これはかなりの二極分化だと思えます。塾の業界というのはそのような特徴をもっているのです。

それから3番目が、今日、私が一番お話ししたいことの一つで、学校の授業と塾の授業の違いについてです。まず、「塾の授業」についてお話しします。

お手元の資料に、補習塾の授業例をいくつか示してあります。補習塾というのは基礎・基本を身に着けるといふことで、どちらかというところ訓練の要素が強いのが特徴です。訓練と言うと教育関係者は嫌がりますが、練習する部分が非常に強いと思います。

今、はやり、「百ます計算」は、ほとんどの方がご存じだと思います。しかし、知らない方のために「九九の百ます計算の例」も出しておきました。子どもが瞬間的に答えの数字を、入れていくわけです。「習うより慣れろ」という部分が強いんです。こういう訓練は、算数の足腰を鍛えるのが目的でやっております。すべての塾がこういうことをやってるというわけではありませんが、時間を計る場合もけっこうあります。

資料に出ているのは、百ます計算の例なんですが、計算だけの専門の塾もあります。そういう塾では、とにかく基礎・基本を徹底的にやります。学習範囲というのは、あくまでも学校の教科書の範囲をそれほど逸脱していません。学校の範囲外のことをやることはめったにないのが補習塾だと思います。

もう一つの補習塾のタイプとして、「なぜそうなるのか、原理やしくみを教科書などを参考に教えて教える」という塾があります。これはフランチャイズで展開している塾や、家庭の主婦が自宅を開放してやってる塾にけっこうあります。そういう所では教科書などをベースにして教えています。

資料に少し例を書いておきました。これは詳しくやっていくと時間がないので、ちょっと見てください。補習塾では、小数同士の掛け算、小数とは何かというところから解きほぐしていきます。計算だけをやるわけではないのです。

例えば 0.1×10 、 0.1×100 、 1.2×10 というのは、最初 0.1×10 という計算ができるようになったら、そのあと帰納法的な学習で 0.1×100 がわかるようにします。次に問題を出しておきましたが、こういう問題を徹底的に練習してできるようにします。

次に資料の2ページを見てください。補習塾の原理・仕組みにこだわる授業例です。これは中学受験の進学塾とは典型的に違うところです。例えば 1.2×1.3 の計算を取り上げてみます。正攻法の学習法を教える補習塾では、必ず小数点がなぜ左に二つ動くかということを一生涯懸命教えてます。そういう塾はけっこうあります。

しかし、中学受験を専門にやってるような塾では、実はこういうのはもうできて当たり前ということで、「左に二つ動くんだよ」ということを強制的に教えてることが現実的には非常に多いです。原理・仕組みの所は飛んでしまうわけです。補習塾ではこの辺を丁寧にやっていきます。ここでは東京書籍版を参考にして、教科書ではどのように 1.2×1.3 は 1.56 になるのかということをお示ししておきました。

教科書にこういうふうに出ているんですが、これだけで理解できる子供というのは、学校では10人中2人か3人いればいいほうです。ほとんどの子どもは、ぼかんとしています。私は資料に示したような整数を例とした方法で教えています。

例えば 1.2×1.3 を $2 \times 3 = 6$ という整数に置き換えてしまうのです。整数に置き換えて、お互いにどういう関係があるかを発見させます。それが資料の2ページの上から2番目の図です。小数×小数は5年生で今は習いますが、整数同士のかけ算なら、ほとんどの子どもが分かります。整数でやった後、次に小数でやります。これは類推することになります。ある程度当てはめのような感じにもなります。このように段階をふんで教えると、ほとんどの子は、分かってできるようになります。このあたりが補習塾の腕の見せどころだと思います。

3番目は、進学塾の授業の例です。中学受験を専門にやってる塾の方のなかには、「あ、こんな馬鹿馬鹿しいよ。こんな簡単なの、小宮山、何言ってんだ」と言う方がいらっしゃるかもしれませんが、ちょっと見ていてください。保護者会などでお母さん方に「正方形の面積は対角線1本の長さがわかっていると出せるんですよ」と言うと、中学受験を考えてないお母さんの中には、びっくりする方もいます。

正方形の面積というと、普通の発想では縦×横です。しかし、対角線1本の長さがわかっていたら対角線×対角線÷2で、実は面積が出せるのです。それを一般の進学塾では裏技として

公式を覚えさせます。これを利用した応用問題というのが、実は入試問題にけっこう出ます。

5、6年前には麻布中学にも出ております。

一般的な進学塾の授業の例も資料に書いてあります。もう一つ、AとCと対角線を引くと直角二等辺三角形が二つあるから、 $10 \times 5 \div 2$ となります。それで一つの三角形の面積が出ます。その倍が求める正方形の面積です。説明にかかる時間は10分から15分の場合が多いと思います。

次に資料の3ページを見てください。「原理・しくみにこだわる進学塾の授業」というのがあります。ここでは、直角二等辺三角形の性質から始めます。直角二等辺三角形というのは、子どもにとっては非常に不思議なものなのです。

資料の直角二等辺三角形を見てください。Aから垂線を下ろして、これをOとします。すると不思議なことに全く同じ形の直角二等辺三角形ができるのです。これを、相似と言います。同じ形で大きさは違うけれども全く同じ直角二等辺三角形ができるわけです。そうするとAOとBOとDOが等しいわけです。直角二等辺三角形には、そういう性質があるわけですが、そういうところから解きほぐしていくのです。

こうして、直角二等辺三角形の性質を知ると、AOの長さは実は対角線の半分の5センチだということが分かります。競争原理を最優先してるような進学塾では、あっという間に終わります。こういう説明はあまりないと思います。

では次に、この直角二等辺三角形の性質が分かったら、この正方形の図に戻ってください。三角形ABDというのは $10 \times 10 \div 2 \div 2$ で求められます。それが2倍だから、結局、正方形ABCDの面積は $10 \times 10 \div 2 \div 2 \times 2$ というようになるのです。小学生にとっては $\div 2 \times 2$ というのはなかなか難しいのです。これは具体的な数値を入れると、結局は同じだということを、子どもは分かってくれます。2で割って2で掛けるっていうことは元に戻ることであり、1を掛けることと同じだということに気づくのです。そうすると最終的に $10 \times 10 \div 2 \div 2 \times 2$ は $10 \times 10 \div 2$ ということになり、この正方形の面積が出るというふうに持っていくわけです。

対角線が交わった所を見てください。点Oの所がそれぞれ直角90度になっています。小学生の場合、子どもは直感的に分かりますが、ある程度理屈で教えたほうがいいと思います。この四つの等しい角を合わせて360度なので、一つ分は何度だと考えさせます。そうすると子どもは90度というふうに答えます。そのようなことを資料に書いておきました。

次に、「公式を丸暗記した場合と、原理・しくみにこだわった場合の違い」について述べたいと思います。対角線×対角線÷2の問題の場合を考えてみましょう。これは実は、私が中学受験生を教えていて、はたと気が付いたことなのですが、公式だけを丸暗記した子は、次のこのひし形の問題ではうーんと言って困ってしまうのです。手が動かなくなる子もけっこういます。実際授業をしてみただけであれば分かると思います。

これはどうしてかという、ひし形には対角線は二つありますが長さが違います。先程の正方形の場合は同じ長さの対角線なので、成り立つんだと丸暗記している子がいるのです。こういうケースがとても多いです。そういう子どもは、このひし形の問題になるとできなくなるんです。なぜなら、ひし形だと対角線の長さが違うからです。

原理・仕組みにこだわる教え方をすると、このひし形のような問題も、BDが18センチでACが10センチだったら $18 \times 10 \div 2$ と求められるようになります。子どもにとっては不思議です。しかし、先程言ったように対角線×対角線÷2の公式を、自分で導き出すことができる子どもは、このひし形の問題をすらすら解きます。非常にここの所は重要です。

専門用語で言うと、これは転移がなされるわけです。つまり応用が利くのです。受験でも公式を丸暗記すると、実はこれは不利になるわけです。余分な知識をたくさん覚えることになるかもしれませんが、「原理・しくみ」にこだわって学んでいくほうが、結局自分の力で早くこういう問題が解けるようになるのです。

たこ型の面積もそうです。日本のたこではなくて外国のカイトです。あのたこ型も実は対角線×対角線÷2で計算できるのです。進学塾の一つの授業例をちょっと簡単に、非常に急ぎ足でやってみました。

この中学受験の比の問題を説明していると時間がなくなりますので、詳しい内容はあとで読んでおいてください。少し簡単に御説明します。4ページを見てください。「ボールペン2本と鉛筆3本の値段は同じで、ボールペン1本と鉛筆1本の値段の差は50円です。ボールペン1本の値段はいくらですか」。これは毎年どこかで必ず出る中学入試問題です。中学受験生の場合は、基本的には方程式は使いません。方程式を使わないでどういうふうにしてやっていくか。これは相当いろいろ工夫しないとイケません。ある意味では論理的思考能力をかなり使います。方程式ではあまり頭を使わないで機械的にできます。そんなことをここに少し書いておきましたから、あとで時間のある方はお読みになってください。

次に、受験勉強イコール詰め込み教育かについて話します。丸暗記式受験勉強をやれば、これは詰め込み教育になります。しかし、原理・仕組みをきちんと教えた受験勉強というのは、決して無駄にはならないという考えを、私は持っております。

レジュメに戻ってください。4番目は、「塾の役割」です。ここは非常に簡単にお話しします。まず、「学力向上」です。これは親が願っていますから、これは補習塾でも進学塾でも同じです。総合塾や進学塾なら受験のための役割があります。

それから、補習塾にしても進学塾にしても、子どもはけっこうそこを居場所にしてるのです。塾は子どもが群れる場所となっています。これは日本独特の現象です。なぜかといえばこれは私の一つの推論なんですけども、日本の伝統的な地域社会の子育てのあり方に起因するのではないかと思います。江戸時代からのいろいろな文献をちょっと当たってみればよく分かりますが、日本の子育てでは、一般庶民は家庭の中で子どもをしつけるという機能が非常に弱かったのです。

これは東大の広田さんからヒントを得て、ちょっといろいろ調べてみました。（「日本人のしつけは衰退したか」広田照幸・講談社現代新書）それを読んで気がついたのですが、日本は地域社会の子育て力が非常に根強かったのではないかということです。江戸時代からの寺子屋は地域社会の教育の力の1つでした。日本は地域社会のそういう教育機関に何かを委託するという、伝統的な流れがあるのではないかという感じを持っています。

それから、受験情報が中心になると思いますが、学校とは違った教育情報の発信地という役割を挙げることができます。

次にレジユメの5番目に行きます。「塾は学力向上に寄与しているか」となっています。補習塾は、直接低学力の子どもをサポートしています。そして進学塾は、受験知を提供します。受験勉強と学校の学びとの相互関係を考えると、レジユメにある三角形の図になります。

学校知というのが底辺にあります。上に受験知を持ってきました。受験知というのは、受験勉強で得られる知識と思ってください。学校知は学校で学ぶ基礎・基本のことです。この学校知が抜けた受験知というのは、見かけの学力に終わることが多いのです。先程の丸暗記式の勉強法だと、そういうことに陥る可能性が高いということです。学校にも原理・仕組みを教えて頑張っている先生方は、けっこういらっしゃると思います。

入試問題を解くことによって、学校知の内容が定着するという現実があります。これは無視できないと思います。これによって、本当の学力に結び付いていくということになるわけです。受験勉強がいいか悪いかは別にして、受験勉強をすることによって学校で勉強したことが、定着するという現実があるのです。そうすると、むやみに「ああ、受験勉強なんて将来役に立たない。そんなことを今やってどうなるんだ」と批判することが一方的であることがわかります。軽々に受験勉強批判はできません。

学力が向上しているかということに関して資料の5ページ「塾は学力向上に寄与しているか」をご覧ください。これは司会の荻谷先生たちが調べられた『「学力低下」の実態』と言う岩波のブックレットから取りました。塾に通っている子どもと塾に通っていない子どもに分けてデータをお採りになっていました。本当にこのデータを見た時びっくりしました。これを見ていただければ、塾に通っている子どもたちの学力というのは、大体の所で上になっております。このデータを見て、塾は学校よりいい授業をやっているんだと思ってはいけません。しかし、塾は基礎学力に貢献しているということだけは確かなようです。

このデータはフタコブラクダの学力分布図の上での現象であることを忘れないでください。フタコブラクダというのは、学力が低いグループと高いグループに二極分化していることを示

す図です。下位のほうの成績者は補習塾に行ってる可能性が強く、上位の成績者は進学塾に影響を受けてるというふうには私は読み取りました。「補習塾に行ってますか、進学塾に行ってますか」という質問項目があったら、それがよりはっきり出たと思います。

昨年12月にOECDの国際学力調査の結果が出ました。2000年に比べて低下していることがわかりましたが、この学力低下の問題というのは、塾の業界にとっても非常に重要な問題だと思います。どういうことかということ、塾に通わせているにもかかわらずOECDの成績は低下したということです。これは矢野先生辺りからお話があるかもしれませんが、大変、投資効率が悪かったというふうには判断せざるを得ない部分があると思います。塾に行っているにもかかわらず、フタコブラクダの曲線が全体に左に、点数で言うと低い方へ移動してるのではないかなと思っています。つまり、塾に行っているにもかかわらず、全体の学力は低下しているのではないかという気がします。

それからもう一つは、小学生の通塾効果が中学生よりよくないということです。これについては、小学生は受験の動機付けが弱いから低いのではないかと予想しています。受験圧力が弱いということです。そのため小学生の方が中学生より通塾効果が低いと考えられます。

塾が学校に与えるプラスの影響を考えてみます。資料の6ページを見ながら聞いてください。ごまかし勉強でない正攻法の学習法に関しては、学校と塾には共通しているものがあると思うのです。競争原理が働く塾では、教育技術を高めない生き残れないという現実があります。そのため、高い教育技術を持っている塾の先生がいっぱいいらっしゃるのです。それは、私は学校にも良い影響を与えることもあるのではないかなと思っています。学校と塾が授業の内容で連携する余地は十分あると思います。学力向上を願っているという点では同じだからです。

「塾の講師は教育という営みを行う労働者又は経営者である」という点も重要です。間接的に労働者の税金によって成り立ってる公教育とそこが違います。学校の先生方にはちょっと耳が痛いかもしれませんが、塾の講師が学校の教師と違うのは、企業で働くことの意味をよく知っているところです。

これからの時代は、教育と労働のバランスが大切です。今ニートとかフリーターとかいろいろ

るな問題が出ていますが、教育とビジネスの感覚を持っていないと塾の講師は務まりません。特に経営者はそうです。子どもに働くというのはどういうことか、うまく教えることが、学校の教師よりも塾の講師には可能ではないかと思います。私が塾の講師にこれから期待するのは、子どもたちに学ぶ意味と同時に社会に出て働く意義を教えることです。そのことをすごくリアリティを持って子どもに教えることができるのは、塾の講師です。労働や仕事のことがよくわかっているのは、学校よりも塾の方であることが多いからです。

次にマイナス面を挙げます。私は公教育というのは、市場原理には原則的になじまないと思っています。学校が税金で成り立ってるからこそ、塾のような教育産業があるのだというふうに私はとらえております。塾の経営のシステム、それをそのまま学校システムに組み込むことはできないと思います。塾を閉鎖する時は子どもに多大な迷惑をかけます。または合格者実績を水増ししてチラシを作るというようなことや、重複合格者をチラシに出すことも倫理的に問題です。競争原理に公教育が巻き込まれたら、公教育の場でもこのような問題が起きてくる可能性があるということです。そうなってしまったら、大変なことになると私は思います。合格実績や学力向上のことだけを考える公教育になったら大変です。塾のマイナス面もよく検討しなくてはなりません。

では次に、学校と塾が共存できるかを考えてみます。学力向上に関しては、私は、塾も学校も連携してやっていくことは十分可能だというふうに考えております。

次に「階層格差拡大」に関して述べます。塾に行ける子、行けない子の学力格差をどうするかということは、これから大きな問題になってくると私は思います。ですからこれからの塾というのは、この塾に行けない子たちを間接的にどうやって応援することができるかも課題になってくると思います。正直言って、私もまだこの課題についての私なりの「これだ」というような回答は持ち合わせておりません。

私は、進学塾も含めて、塾で皆と一緒に学ぶ楽しさを知った子どもに期待しています。競争で勉強させられるのではなくて、一緒に学ぶ楽しさを知った子どもというのは、知っていることをほかの子どもにも教えたがります。私の塾の子どもたちを見ててもそうです。そうすると、塾で習ったことを学校のほかの子どもにも教えてくれる、そういう子ども達が増えることで、あ

る程度学力差を縮めることは可能ではないかと思っています。基本的には学校と塾、そして行政の間で税金を使うかどうかということも含めて、何らかの話し合いがどうしても必要になってくると思います。

苅谷 どうもありがとうございました。5分ぐらい質問の時間をとってたんですが少し押していますので、大変申し訳ないんですが最後の総括で、皆さんとディスカッションする場でご質問をしていただくことにしまして、一応、会を進めたいと思います。

続きまして、花まる学習会と言う所で教えていらっしゃる高濱先生に引き続きお話をいただきたいと思います。なお、ちょっとの間ですが、前のほうに少しまだちょっと詰まっはいるんですが3人掛けの机ですので、もし後ろの方で机があったほうがいい方は、多少詰めて前のほうに来ていただくと、まだ机のある所に座れる個所が何個所かございますので、もしよろしければ前のほうにお詰めください。譲り合ってよろしくお願い致します。

それじゃ続きまして高濱先生よろしくお願い致します。

高濱 こんにちは。花まる学習会と言いまして、埼玉中心に12年やってきました。もともとの問題意識は、大学受験を教える中で伸び悩む子の原因というのは低学年時代の、特にお母さんの声かけ、家庭環境でつぶしてしまってるっていうことに、いろんな心の面とか、学力そのものでも勉強嫌いにさせてしまってるっていうような問題だとか、親ごと、地域ごと変えてしまうっていう問題意識で始めました。だんだん大きくなってきたので、今、第1期生が講師として戻ってきた年なんですけども、ずっと中学生もいますし高校生もいる。わらわらと今1,600人ぐらいの中堅の学習塾に育ったっていうようなところなんです。全学年のいろんなことは経験しております。

今日は特に何の枠組みもなく、「塾から見た学校っていうことで話をしてくれ」っていうことなので、世の中の一般的なことというよりは、自分がこういうことをやってきたということ。塾というよりは花まる学習会から見た学校、花まる学習会が取り組んできたことしか言えないと思います。塾は本当に多様でいろんな塾がありますので。ただ私がやってきたことってことをお話ししたいと思います。

最初に、私が言いたいことっていうのを一言で言っていくと、「公立頑張ってくれ」ということです。(笑い) 私も公立、公立、公立で育ちましたし、塾はほとんど行かずに。それをもがき苦しむ中で「どうしても上昇したい」というような意欲が既にあった子供だったと思いますし、そういう子は自然と学習方法を学ぶし、教科書でじゅうぶん勉強してる。特に重要な参考書なしでやりました。

そういう時に、昨日、ちょうど作文コンテストっていうのをやってまして、千何百人から選ばれて第二次審査を経たような作文を見てたんですけど、ちょうど学校の話をしなきゃいけないものですから、見てて、ふと思った。

今日は学校の授業力の低下っていうことは指摘したいのですが、学校ってやっぱり素晴らしいなと思いました。本当に、いわゆる学力じゃないすごい経験をたくさんしてて、発表会の直前のどきどきする感じで、一生懸命みんなでやり遂げた、感動したというような作文がたくさん出ているわけです。

あれは、やっぱり学校っていう一つの箱があるおかげで、子供たちはいろんな行事行事で、すごくいろんな心が躍動するような経験を実際してるわけで、学校が必要かっていうと、これは多少、目を引くようなことを書かないとだれも来てくれないかなと思ってやったんですけども、必要に決まっているわけです。そういう学校が必要かっていうことに対しては、「必要です。だから公立、頑張ってください」というのが一番言いたいことです。最初に言っておきます。

それで「塾から見た学校」ってことで1番から順番に行きますが、これは3年前ですか、ちょうど丸3年ぐらいになりますけど、臨床センターのほうで「学力低下のことについて何か言え」とってことで言われた時に発表したのとほとんどかぶるようなかたちなんですけど、まず(1)(2)、上にあぶれた下にあぶれた。あぶれたっていうのは失職した、職業を失ったっていう意味ですが、要するに、本業である学業が学校でできないと。何のために行ってるか分かんないってことが実際に起こっているっていう意味です。

まず①小5の男子Aくんですけれども、これは3年前の事例ですが、平行四辺形の面積の公式を、もうほとんどの子が塾に行っているんで、もうみんな分かってる。縦掛ける……。要するに、底辺×高さっていうことなんですけど、「さあ、これはどうなのかな」という話で、ダンボールを先生が切ってきたのを持ってきて、6人掛けぐらいでみんなで配って「研究してみなさい」。「底辺×高さだと思います」って思ってるんだけど、だれも言わずに一応相談してるふりをして、一授業の最後の最後に「ほら、これをこっちに持ってきたら底辺×高さになるじゃない。長方形と同じだよ」っていうことをやられて、みんな「はあ」と言って（笑い）。

何かというと、もう先生……。これは子供の言葉なんですけども「先生の給料のために我慢しているんだ」と。それは、本当の本音です。もう今の6年生で中学受験をやる子は、ほとんどみんなそう思ってると思います。先生は好きなんです。なじむし、やっぱり先生のことを好きだし、だから裏切りたくないの、それはこらえているんだと。その時に子供が言ったのは力別のクラス、いわゆる習熟度別だと思いますが、言っていました。それを言ってもう3年たって、このことについては習熟度別はいろんな所で挑戦されてることは聞いてます。いろいろ問題点も多いと思いますけれども、徐々に世の中が変わってるのかなと思うところです。

2番は、これは今年の事例ですけれども、8人ぐらいいるクラスなんですけど、6人が学校のクラスは学級崩壊だって言ってるんです。「もう、みんな立ち上がって歩いています」と。「外、出てっても先生、何も言いません」って話を聞いて、「はあ、そんなことになってんだ」って、もうこちらも驚いたんですけど。「勉強は塾でやるものだ」ってもう言い切ってますし、「学校の授業はいったい何のために行っているの」「まあ、休憩ですね」って、これ、本気でそういうふう言ってるんです。「学校自体は、じゃ、どうなの。そんなことのために行ってどう思うの」って言うと、「いや、学校は楽しいです」。やっぱり友達とちょっと触れ合うことだけでもすごくうれしいし、やっぱり楽しい場所なんだっていうことは言います。

それから（2）で下にあぶれた子の事例なんですけど、これは大体中学生ぐらいでもはっきりどうしようもないかたちとして出てくるというもので、一言で言えば、放置された子です。上の子っていうのは犬のしつけで「待て」っていうことをやられていて、「まだ君たちは黙ってじっとしてなさい」って言われているような子で、2番目っていうのは放置されている子だと思います。

Cさんの場合ですけれども、要するに、まじめ型っていうか言われた通りにはやる。長女でお母さんがきいきい叱ったタイプだと思いますけれども、やっちはいるんだけれども何も頭に入っていないと。勉強というと、こういう子は、「先生、どういう問題集をやればいいですか」っていうような聞き方をしてくるんです。それは本質的にもう違うことです。

要するに1冊でも、どんな教科書でもじゅうぶんに書いてあるわけだから、どういう勉強の仕方をすればいいですかっていう、その視点が大事なんだけれども、何か購入することでできるような気がしてるという、そういうタイプなんです、「1問でも、今日、分からなかった問題を復習しなさい。どうして分からなかったかっていうのを突き詰めればいいじゃないか」と、そういうことを言うと、復習、いわゆる振り返りはやったことがない、そんなことは。とにかく学校でじっとしている、テストがある、点数が出た、良かったらうれしい、悪かったら残念、終わりっていうかたち。要するに、学習サイクルのチェックが終わって、できなかったときのアクションっていうのが全く行われてない。そのまま放置されている子です。

②は、中3のAくんですが、これは本当に学力がどうにも無い。九九も怪しいし、分数なんかとんでもないし、「ノート取れ」って言ったら本当にノートの真ん中から書き始めるっていうか、取り方すら知らないというようなタイプです。これはもう宿題もやっていかないんだけど、先生はそれでいいっていうか、何も言われない、言われたこともないって言うんです。そんなことがあるのか不思議でしょうがないんですけど。塾で宿題をやらずに戻してしまったら、もう本当に大体、お母さんがどっかで察知して2、3週間でやめられてしまいますから、宿題をやらせないまま放置するっていうことはあり得ないわけです。そういうことが実際に起こってる。そうやってどうにもならなくなって塾のほうに来る。こういう事例が二つ。典型的に二極化のこぶの二つだと思いますけれども、両方ともあぶれてしまってる。

それから3番目、概観はぱっぱと行くと、学力は、もうこれは議論の余地なく低下してると思います。実感としてです。塾というのは何かっていうと、検証してる余裕はない。それは社会的には塾の役割でも私はないと思います。検証っていうのは、やっぱり大学できちんとやってもらって、それが積み上がる言葉としてあるべきものだと思いますし、塾の一番の役割っていうのは、本当に手っ取り早く思ったらやる。効果が出ると思ったらやれるっていうことです。

そういう中で、我流に陥りがちな非常に危機もリスクもあるんですけども、最終的には市場原理でお母さんが「これは購入に値する」と思えば買ってもらってるというようなものだと思いますけども、その中で、実感として明らかに低下してると思います。それから二極化が進んでると思います。

それから3番目は、学習法の指導っていうのをどうして学校はやってくれないのかなっていうことは常に思います。簡単に言えば、もう姿勢一つができてない中学生がぞろぞろ来んです。それって低学年の課題だと思うんですよね。きちんと座って、それから鉛筆の持ち方だとか、もっと強調したいのはノートですけども、ノートを取るっていう意味とか、どういうノートを取らなきゃいけないとか、そういうことについての指導が全くなくて、だから教科の、底辺×高さっていうことは教えてくれるんだけど、それをどう身に着けるかっていうところは指導してくれてないっていうふうに感じます。

それから個人別の課題には、これはエネルギー的に、コスト的に無理な部分だと思い、あとで提案しますが、全く対応できていないんだと。

それから5番目は、やる気にさせればいいのになと思うんです。それをやる気にさせるシステムっていうのが、研修システムとしても、塾にあって学校ではやられていないものの一つだろうと思うので、またあとで提案します。

大きい2番。学校と異なるであろうわれわれの塾の取り組みっていうことで、私たちがやってきたことっていうことなんですが、「置かれた立場」はさっき言ったのでいいと思います。強み、置かれた立場1、2、3と書きました。とにかく成績が伸びないという時点でやめられてしまうし、「教え方が下手」って言われる教師は、もう即失職なわけです。塾を変えたとしても、それは実力がないわけですから、もう生き残れない。そういう中にいる。

学級崩壊ってよく言いますが、学級崩壊は塾にはありません。あった時点でつぶれてしまう、そんな評判が立ったら。だから、やる気になれば止められるんです。それは塾にむしろ聞いたほうがいいんじゃないかなと思う部分なんですが、そういうことです。キーマンがいたら、それはもう個別にしてしまわざるを得ない。そういう枠として持つ。流動的っていうか、柔

軟にぱっと対応してしまうわけです。

あとは、やっぱり最初のしつけ部分っていうのをすごく厳しくやるっていうのはやっています。強みは毎日の現場で、それから思ったことを即実行できること。弱みとしては検証力っていうのがない。そんなことをやってる余裕もないので。それから我流には非常に陥りやすいっていうようなことだと思います。

そんな中で我流でもあるかもしれませんが、われわれのやってきたことっていうことを言いますが、(2)の動機付けの研修ですが、これはサービス業のいろんなノウハウ本を見るとほとんど書いてあることばかりなんですけれども、①は私の信念です。よく「どうすればやる気になるか」みたいなことを言うんですね。いろんな所で話題になったりするんです。

茶髪で腰パンっていうんですか、パンツ見えるような、ずり下ろしたような履き方をしてきたような、いわゆる地域の不良も来ます。でも、彼らも絶対に伸びたいんですよ。「やるね」って言われたいんです。これは自信を持って言えます。必ず、彼らは伸びたいと思っている。そこは何かっていうと、信頼する、いわゆるカウンセリングで言うラポールだと思いますが、この人ならと思えるような人の前では、やっぱり頑張りたいし認められたいっていうものを必ず持ってる。今までそれで特に苦労したこともないです。そういう考え方でやっています。

それで、じゃあ例えば何をやるかという具体策として、名前を呼ぶ。例えば名前を呼ぶというのは、「おお、できたね」じゃなくて、「おお、ひろし、できたな」というかたちで付けるという細かい作業。これは一流ホテルなんか行くとされますよね。「高濱様、ようこそいらっしゃいました」とか、ちょっとしたところに名前を付けるだけでも、人間っていうのは面白いもんで認められたいわけです。認められたっていうことが起こるわけで、例えばそういうものを、笑われるかもしれないけども意識的にやってるわけです。こういうことが非常に効果的であると。

それから「笑顔」の訓練もあります。授業中、講師のビデオを撮って「あなた、笑ってませんよ」っていうのを見せ付けて。意外と分からないです、自分が笑顔でないことっていうのは。そういうものをビデオに撮って笑えてないものを見せるとか。

それから「一日に一つの発見」っていうのは、「あれ、髪切ったんだ」っていうようなことです。要するに、最初の出合いの瞬間に何かを発見してあげて一つ言うってことで、子供はちょっとうれしいわけです。例えばそういうことです。もうあとはいちいち読みませんが、特に叱り方とかなんかも力を入れて講師の指導をしているところです。叱り方っていうのは一つの大きな勝負だと思ってますので、そういうものもやっています。

それから3番目として、遊びっていうのを意識的に採り入れてる。これは、ついこの間の研究会で、「あ、これは何だ、うちはこれ、やってたのか」と思ったことを書いてるんですけど、何かというと、塾は子供にやる気になってほしい。どうすればやる気になるかっていうのを考えると、遊んだあと子供はやる気になってくれるんです。本当に1回遠足に行くだけで、その後の授業が全然違うっていうことがあるんです。こういうことを意識的に。

意識的っていうのはどのぐらい意識的かっていうと、例えば計算したときに1人に2、3秒ぐらいしか時間が与えられないっていう場合、2、3秒の遊びもちゃんと作ってるんです。それは今こんな所でやるものではありませんけれども、とにかくそれぞれが「遊んだ」と思える状況っていうのをきちんと中に採り入れてます。子供がやる気になってくれる、「この人を好き」ってなってもらうのに一番重要なのは、一緒に遊ぶということだと思って、やっています。あと、宿泊の野外体験なんかでも非常に力を入れてやっています。

それから『学習方法』の指導なんですが、これは今日どちらかという一番メインになるかもしれませんが、定期的なカリキュラムとしての学習法指導講座っていうのを、これは主として高学年以降にやっています。低学年以下に学習法指導講座をやってもほとんど無駄な時間になると思います。低学年では要するに姿勢がぐにゃと曲がったら、「姿勢正して」っていうこと。その都度っていうことになると思いますが、高学年以降は、何のために勉強して、どういうノートを取って、どういうふうに着けていけばいいかっていうことを、あえてやっています。自分の勉強スタイルっていうのをメタ認知で見てもらって、意識してもらってぐんと伸びてくるものですから、このところはかなり力を入れてやっています。

低学年については、さっき言った通り鉛筆の持ち方うんぬんです。分からないときに聞く聞

き方なんかも入会当初やります。つまり袖を引っ張って、「先生、分かんない」っていうふうに聞きなさいっていうことをロールプレーで1回やらせるだけで非常に楽に聞ける。こういうことなんかはやってるわけです。

それから高学年はいわゆる本当に学習法指導で、学習計画の立て方から学習サイクルの話だとかノートの意義とか各科目のノート指導です。例えば6年生算数では標準装備として、授業ノートや演習ノート、復習ノート、知識ノートをみんな持ってて、授業っていうのは主として聞くためのノートなんだっていうかたちで、要するに聞くことが一番大事であって、そこにきちんとしたものを全部定着させようっていうのは無理で、しっかり聞いて・・・。

もうスタンダードでうちはやってますけども、一番大事で聞かせたい授業の時は、「とにかくノートを取らないで、じっと私だけ見てなさい」ってことを言って、「じゃ、さあ、ノートを取りなさい」って言って、ロールカーテンをジャーっと下ろしちゃう。で、「じゃ、ノート取って」ってやる。要するに、しっかり聞いてないとノートに書けないっていう。

要するに、伸びない子の研究をすると、この「見て写し病」って言うんですけど、見て写し、見て写し、見て写し。本当にメモリーの小さいコンピューター状態です。今やったのをどんどん失いながらやってる。全く伸びる可能性のない頭の使い方をしていて、それを阻止するためにカーテン授業っていうのをやっています。例えばそういうことなんです。

演習ノートっていうのは、いわゆる反復はすごく大事なことなので、反復をやらせるノートですが、今度は「きちんと書きなさい」ってことを言うから伸びないっていうことが実際起こる。スピードっていうのはすごく大事な要件ですから、その場合は「もう、とにかくそれは汚くてもいい。どんどん書け」っていうようなかたちで。ただし、できた、できなかったっていうチェックを問題集の番号の所にきちんと書いて終了するっていうことをやる。

それから、一番力を入れてるのは復習ノートっていうことで、これはできなかった問題を書いたりコピーして、解答を書いて、それから「できなかった理由」と「ポイント」を各だけです。これを書いて1ページ。ただそれだけです。本当に自分でしっかり勉強した方だったら当然そういうようなノートは作られたと思いますけども、そういう基本形を教える。

要するに、できなかつた問題ができるようになることが一番大事なんだ。そういうことこそが勉強で、それは仕事を通じて一生通用する。例えば社会人になってお客様が今まで買ってくれたのが買ってくれなくなつたと。それはどうしてだろうって自分なりに追求して、「あ、こういう接客の基本が間違つた」っていうのをノートにチェック付けて、それを次回に生かすっていうことが大事なんです。「これは一生の作業なんだよ」っていうことでやると、非常にみんな乗ってくれて作ってくれます。

ただ、これで大事なのは、1回の授業ではやっぱり無理で、チェックし続けないと子供というのは、何ていうか、形式化しちゃうところがあつて、できなかつた理由「よく分からなかつたから。ポイント、次は頑張る」とか、全くポイントにも理由にもなつていないことを書いて、だけどマーカーできれいに書いてあつたりするわけですね。そういう場合は、常々定期的に2カ月に1回ぐらい私にノートを提出、全員させて、チェックするようなかたちでコメントを入れてチェックしています。

簡単に言えば、そんなことです。そういうノート指導うんぬんを非常に力を入れてやっている。これはそんなに難しいことじゃないので、学校でもぜひやればと思います。一度、草加市の松江中学と言う所で、学校全体にこの復習ノートの授業をやつたことありますけど、そのあとの効果とか、そこまで見てないんですけど、どんな学校でも近くの塾で必ずやっていると思うので、地域の一つの運動としてそういうのもいいんじゃないかと思います。

それから4番目では「父母教育」というのがありますが、これは何かというと、これも学校は手を着けてない部分だし、僕は世の中全体の一つのポイントだと思つていますが、今、親の世代そのものがだらしないし、マナーが守れてないしというような問題があるわけです。

これは一つエピソードがあるんですけど、大みそかの雪の時に、私の友達が、荻窪の駅でタクシー待っていた。もう突然の雪なので、2時間待ちみたいなのでいた。そうすると、子供が「寒い、寒い」って。そうすると、お母さんは一生懸命、実家のおばあちゃんに電話をして、「迎えに来てよ」って。ところがおばあちゃんですから、それも「雪の中行くのだから怖いし」ってもう何かごねていろいろ言つていた。そうしたら、「だって、〇〇ちゃんが『寒い、寒い』

って言ってるのよ。」みたいなことで。そうすると、結局は折れたらしいんですけども。

それは何を言いたいかって言うと、私は九州の生まれ、熊本県で育ったんですけど、子供は風の子だっていうことで、「寒い」と言ったら怒られるような雰囲気すらあったわけですね。ところが、本当に「よし、よし」がここまで来たかっていうぐらい過保護というか、しかもご丁寧にその前にいた老夫婦が場所を代わってくれた、「ああ、かわいそうに」って。

世の中全体で子供が自立できない方向に向かって、ニートとか引きこもりに通じると思いますが、そういう生きていく力を伸ばそうと思っているのかなというような、だんだんそういう方向に向かっていていると思います。親の世代が問題だということで、ちょっと話が長くなってすみません。要するに、お母さん、お父さん教育から始めようというのがもともと私の問題意識です。

要するに、どうして伸びなかったか。伸びなかった子の研究をすると、お母さん、やっぱり感情的に叱っていたり、言わずもがなの「どうして分からないの。何回言えば分かるの」っていうような言葉を浴びせ掛けて、親は言ったまま終わりなんですけど、子供は覚えているわけですよ、あれで嫌になったということ。そういうのをカウンセリングの中で、今、幼児のお母さんに意識してもらうことで全体が変わるという問題意識です。で、やってきました。

そこに月1回の父母学校とか、体験教室だとか書いてありますが、今、勉強ばかりして育てて遊べないお父さんというのが、問題になっています。これはちょっと詳しく言わないと伝わらないと思うんですが。その遊べなさ具合が、わが子のいろんな問題になって思春期に出ることがわかりました。うちは独自の相談機関を持っています、精神科のお医者さんも定期的に来てやってもらってたんです。今ちょっとお亡くなりになっちゃったんですけど、その中で分かったことです。

お父さんの遊びっぷりというのは、遊べるお父さんにとっては何が問題か分からないようなことですが、問題が起きた思春期の家庭で振り返ると、「いや、私はちょっと子供とどう遊んでいいか分からなかったんです」っていうような話を聞く。そういうようなことについて、実際に遊び方を、一緒に遊ぶという場を提供して遊んでもらっています。家庭が安心した場所とし

て、子供たちがさっき言った信頼感に満ちた空気を作れば、子供は勝手に勉強するものだという考え方に基づいてやっています。

それから5番目は「思考力・発想法の指導」ということで、これはまあ私が算数屋で、ここはちょっと自分なりこだわりを持って追求し続けていることなんですけども、要するに東京出版、私が一番信頼している日本の文化というか、素晴らしい一番できる人は、みんな田舎からでもやっぱり東大来れるのは、東京出版の本があるからだと思っていました。今、いろいろ時代も変わって、もっといいのも出てきているかもしれないですけど、ああいう本ですらやっぱり「いい解答」というと、「ここに補助線を引くと」と、もう引いた解答から始まるんですよ。

ところができない理由っていうのは、その1本が浮かばないことが一番の問題なんである。そういう発想とかひらめきって今呼ばれるものなんですけど、そういうものを一つの自分のライフワークとしてやって、立体の問題が解けない理由っていうのは、やっぱり平面化するという視点がないわけですね。できる人はさっさと浮かんでいるんだけれども、それは平面化するということで分かるようになる。こういう発想法というのをかなり細かく自分なりに仕分けして子供たちに伝えています。

で、②、③書きました。低学年時代はそういうことじゃなくて、能力そのものが上がるような、野外体験も年何十回もやっていますけども、そういうような野外、実際の体験から始まるほうがいいと思っていますのでそういうものから始めて、それからオリジナルのいろんなパズルとかそういうものを一生懸命やると。立体パズルなんかを一生懸命やるということで進めて、それで高学年以降、特に5年生以降ですかね、主として。これはもう発想法を体系化して教える。これは要するに、そういう空間認識の能力そのものはもうこれ以降私は伸びないものだと思うので、できる子の発想というのを知識としてなぞらせてると理解させる、いうかたちでやっているということです。

3番目、最後ですけれども、「学校は必要か」ということなんですけど、これは個人的見解としてさっき最初に言った通り、公立がこのまま地盤沈下したら、つまりお金持ちでなければいい学校に行けない。社会的にもいい所に行けないということが定着してしまうと、「滅びる」とちょっとおおげさに書きました。どう考えても、例えば貧しくて頭のいい人間はゲリラ化したり

反社会的になつたりとか、いいこと起こるわけないわけで、やっぱりそれをすくい取るシステムっていうのはすごく大事で、今までの日本の素晴らしさだったと思うので、公教育に頑張ってもらいたいということですね。

で、塾が学校を作るという、私も「作りたいな」という希望だけは今、宣言したばかりのところなんですけども、可能性はあるんでしょうけども、今ある売り上げ何十億かのお受験専門の塾っていうのがありますけども、そういう塾が学校に取って代わるということはありません。

これはやっぱり子供の知・情・意・体など総合的に人間全体を育てるという意味で、作文コンテストの作文を見れば見るほど、やっぱり昼間の評価されない、あまり学校としてはかたちに出ない部分でいかに育てているかということがもうありありと伝わってくるので、「昼間」、それから「毎日」、それから「ハード面」、講堂もあって体育館もあって広い校庭があるというようなものも含めて、学校にかなうわけがないので、とにかく公立学校に頑張ってもらいたいということが個人的な見解です。

改革の課題として（２）まとめておいたのですが、思い浮かぶことを列挙しているだけなんですけども、①番目、これがやっぱり私はいろいろなテレビとかで教育番組とかを見てても、一番の核心なんだけれども、やっぱりみんなちょっと怖いというのかな。人事制度だと思いますよ。裸の王様じゃないけど、本当に変えたいのなら「要は人事でしょう」、と。駄目だったら辞めてもらうということが、東京都なんか一生懸命いろいろ挑戦し始めてますけど、普通のほかの民間の世の中だと当たり前なことだと思います。

これも塾ですから何の遠慮もなく言いますが、その藤沢市の調査ですね。教え方が分かりやすいのは塾が65パーセント、学校11.5パーセントというのは、これは問題だと思いますね。つまり、学校は楽しいらしいと。だけども、例えば病院で「病気がうちは治せないんだけどね、でも患者さん、楽しく来られます」ってことはあり得ないですよ。病院という枠で資格まで与えて、社会が負託しているものは病気を治すことですよ。

で、学校って基本的に「勉強を教えてくれる所」であるべきであって、その一番大事など

ころは放っておいて、社会的な力みたいなところは逃げちゃって、その社会的な力は大事ですよ、すごく。なんだけども、やっぱりまず学力を第一に保証してくれないと困るというのが、これは塾としてというより、一市民としてのいわゆる期待です。で、とにかく「置かれた立場」がポイントだと思います。「制度」というのは大きいですから、強力ですから、どんどん変わっていくと思います。

それから、②番は「習熟度別のクラス編成」です。これはだいぶ今は変わっているいろいろ行われている。ただ、成績別に並べてしまえば、クラスを編成をしてしまえばいいというものではないので、その辺りは非常に細かい配慮が必要ですね。

それから、③番目は「学習法の指導」ですね。さっき言った通りで、ノートの取り方とか、これは本当に学校に、公立に通って、彼らが将来自立して仕事をしたときに、お客さんに逃げられずに食べていける基本だと思いますので、学びの方法ということをお教えるというのはすごく大事だし、この部分は、小宮山先生もおっしゃいましたが、生き残りでも必死で技術が高い講師というのはいっぱいいますから、そういう外注でもやってもいいんじゃないかなと思います。

それから、「個人別の課題への対応」です。ここもすごく大事だと思うんですけど、今の学校のシステムで、40人なり30人になったとしても、先生が個別に対応しているのは無理だと思います。それは時間もないし。ただ、もっと柔軟に地域の人材というか、大学生で十分なんですよね。ある一定の何か研修というのかな。例えばひどい言葉を使わないとか、うそを教えないみたいなことでいいと思うんですけど、ボランティアで来ようという人ですからいい人でしょうから、そういうものを活用して学習相談室などを、さっき言った草加市の松江中ではやられていたけども、そういうようなものをもっともっと学校の一つの基本スタイルとして採り入れて、分からなかったらそこに行けば丁寧に教えてくれるというようなものもやってもいいんじゃないかなと思います。

やりたい人はいっぱいいると思います、システムさえできれば。地域、地域でお年寄りだったり、退職した先生だったり、若者も非常に子供が大好きですから、本当に燃えて教えてくれると思います。そういうものもいいんじゃないかと。

それから、5番目は「動機付けの研修」なんですけども、これは要するにサービス業としての、ということになると思いますけども、「先生との信頼を取り戻すことが、一番の動機付け」と書きましたけど、信頼というか好きは好きなんですよね、みんな、先生たちのことは。サービス業でこれは本当にたくさんいい本、出ていますので、そういうものでやってみてはどうか。個別の勉強会みたいなものでもいいと思うんですけども、やったらどうかなと思います。

それから「父母教育」。これもぜひ、国として本当はやってほしい部分ですけど、親をやっぱり変えないと、特に低学年時代に最初やっておかないと、つぶすだけつぶして「うちはこんなもんだ」ってお母さんは言うんだけども、やられた側というのはぐさぐさ刺されて「もう勉強も嫌だし、心も傷ついている」という子がたくさん出てきているんですよね。そういうようなものに対する対応として父母教育というのをしっかり。

「学校でやる公式行事だ、必ず来てください」という話になれば、来てくれると思うのでぜひ。これもポイントだと思うんです。要するに、急所だと思うんだけど何もなされていない部分だなと。むしろ、「親が苦情を言う、それからそれに対応する」という関係になってしまったりしていますよね。もっと指導するというぐらいの勢いでいいと思います。

それから、7番、「評価システム」というのを、やっぱりこれは制度として作るべきであると。授業評価だったり、学校評価だったり、学力評価だったりということです。ちょっともう早口で全体行きましたけど。よろしいでしょうか。

苅谷 どうもありがとうございます。ちょっと午前中の時間しかないために、2人の先生には大変興味深いお話を本当に短い時間でお話ししていただきました。まだ言い尽くせない部分というのは多分にあると思いますので、そこら辺はまた総括討論のところで補っていただければと思います。

それで、質問の時間もそこに全部一緒に合わせてやることに致しまして、続きましてお二人のこれは教育学研究科のほうからのスタッフですが、コメントをお願いしたいと思います。初めに、じゃ、市川先生のほうからお願いします。

市川 教育心理学コースという所に、所属しております。市川です。私は今日のお二人の先生のお話を伺って、主に二つの話をしたいと思います。学校教育にとって塾から学べることはどうということなんだろうか。今日は塾からのメッセージということで受け止めて、塾に対する批判というのは社会的にもたくさんあると思います。しかし、むしろ塾から学べることはどうということなんだろうかというのが一つの話です。

それから、もう一つは社会全体の中で、塾も含めた学校以外の教育システムをどう生かしていくべきだろうかという話を、10分くらいの間にさせていただきたいと思います。

初めに、これは学力低下論争の中でも時々引き合いに出された藤沢市の中学3年生に対する学習意識、学習行動の調査というのがあります。字はちょっと見にくいんですが、グラフとしては非常に明解なものです。「あなたは学校の勉強についていく自信がありますか」と。これ、1965年から5年おきにずっと調べているんです、2000年までです。

この黒い所が「学校の勉強についていく自信がじゅうぶんある」という子供たち。白い所は「あるともないとも言えない」、「全くない」というのがグレーの所です。じゅうぶんあるという子はもう65年からもうどんどん減っていきます。不思議なことに、指導要領の内容というのは削減に次ぐ削減をしているわけですけれども、学校の勉強についていく自信がないという子はどんどん増えている。

子供たちは、じゃ、どうするかという。塾に行くわけですね。これは通塾率です。「学校以外で習っているものに○を付けてください」で、塾だけを取り出したものです。65年は37パーセントの中3生が塾に行っています。もうどんどん増えていきます。2000年度は66パーセントの子供たちが塾に行く。大体全国平均と同じような数値を示していると思います。それだけ塾にたくさんの子供たちは行っている。

2000年のPISA調査の結果が出た時に、あの時はけっこう日本の子供たちの成績、良かったんですね。それで、学校関係者、とか行政の人たちはかなり胸をなで下ろしたというような話は聞いています。

しかし、私はその時から、日本の高校1年生ですから、高校受験を終えたばかり。受験があつて塾にこれだけ通つていて、この結果ということは忘れてはいけないんじゃないかということを書いてきました。要するに塾を込みにしての学力がPISAにしても出ていたんだということなんです。

では、塾と学校を子供たちはどうとらえているのか。これ、いろんな質問がずらっと並んでいるんですが、「親友がいるのは学校ですか塾ですか」。一番上は、「親友がいるのは」です、黒い所が学校です。「親友がいるのは学校」と77パーセントの子供が答えています。で、「楽しいのは」というと、6割は学校なんです。ね。「必要なのは」と聞くと、ここら辺からだんだん下がってくるんですが、50パーセントぐらいは学校です。「好きなのは」46パーセント学校です。「退屈なのは」だんだんこう減ってきます。「おせっかいなのは」、「気が重いのは」とだんだん減ってくるんですが。

下の二つですが、「受験に役立つのは」12パーセントが学校と。これは確かにそうだろうと思います。塾のほうが受験に役立つことをやっている。それは学校の先生も仕方ないかなと思うんですが、一番下の項目、これは学校の先生にとってもショックだろうと思います。「教え方が分かりやすいのは」11パーセントの子供が学校と書いて、65パーセントの子供は塾と言う。これは高濱先生の最後のほうの話でも少し紹介されていた通りです。

全体として見てみますと、今の子供たち、これは中3ということになっていますが、学校には友達もいる。楽しい所で、部活もあると。要するに、学校というのは勉強する場所というよりは人間関係をつないで楽しい所。悪く言うと息抜きのような所になっています。勉強が本当に分かりやすいのはどちらかといえば塾なんだ。受験に役に立つという直接的な目的もあるかもしれませんが、塾の授業のほうが分かりやすいし充実感があるというような子供がけっこう多いという状況になってきている。このような状況で、塾の存在というのはかなり子供たち、あるいは日本の教育にとって大きなものになっている。これはもう否定できない事実だろうと思います。

今のデータでちょっと不思議なのは、これだけ子供たちが塾に行っている、行くようになってどんどん増えているのに、日本の子供たちの学習時間は減っていると言われていています。藤沢

市の調査でも、やはり学習時間は減っているんですね。

じゃ、何で塾に通うようにどんどんなっているのに、家庭や要するに学校外の学習時間は減っているのだろうか。一応、データを信頼することにすれば、昔は何かがあった。宿題だろうと思います。学校というのは昔けっこう宿題が出ました。私たちのころでも、日々の宿題、夏休みもけっこう出ました。宿題はどんどん出なくなっている。

これは恐らく学校の先生自身をご存じだろうと思います。宿題をあまり出さない方針に移行してきている。で、私が子供のころからよく言われました。「アメリカの子供たちは宿題なんかやらないんだよ」と。「学校で全部終わらせるんだよ。教科書も学校に置いていくんだよ」というようなことをよく聞かされました。日本の子供たちは家で勉強し過ぎ。そう言っている間に、家庭での学習時間というのが先進国中で最下位になってしまった。

宿題をどれぐらい出すのかというので、私たちがちょっと調べたデータがあります。「宿題をどれぐらい出しますか」と。これ、小学校の低学年、中学年、高学年。で、低学年が一番左は1日1時間ぐらいの宿題、もしくはそれ以上出す。次が30分ぐらい。3本目が1日10分ぐらい。これ、全教科の合計です。宿題をほとんど出さないというのが一番上にあります。低学年で10分ぐらい。10分をどう見るかですけれども。まあ、そんなものかなと。で、それが中学年になって少し上がってくる。で、高学年で30分ぐらいと。

小学校でそんな状況なんです、中学校のデータはけっこう面白いです。これは数学を中心に調べたので、調査人数は中学校では数学が非常に多くて、ほかのデータは20人ずつぐらいでちょっと少ないんです。これも、左からこう4本あるんですが、これも各教科ごとに先生が宿題を出すわけです。数学では、一番左の棒がない。つまり、1時間ぐらいの宿題を出すようなことは数学ではないと。10分、30分でほとんど出される。

理科でぎゅっと高いのがあります。宿題をまず出さないということです。理科の先生はもうほとんど宿題を出さない方が大半。それから、社会の先生もここがぐっと高いです。ほとんど出さない。ほかの教科で少しぐらいというかたちで、昔のデータがないのでよく分かりませんが、宿題というのはいまあんまり出てないかなと。

それから、予習をしていくことなどとなると、中学校で例えば、「予習はぜひしたほうがいいと思う」、「したほうがよいと思うが、必ずということではない」、「あまり必要とは思わない」、「しないほうがよい」。これは4本並んでいます。で、これもちょっとじっくり見ていただくと面白いんですけども、例えば理科の先生、ぜひ予習をしたほうがいいという人はゼロです。数学もあまり予習を好まないという傾向があります。

英語でも「予習はしないほうがよい」という先生もけっこういるんですね。私、一番びっくりしたのは英語でした。予習して単語を調べたり、あるいはテキストを読んできたりすることはしてこないでほしい。なぜかという、「今の英語教育はまず耳から入るのである。ですから、先にテキストを読んできてはいけません。まず授業でテープレコーダーを聴くなりして、耳から入りましょう」。これはけっこう増えている考え方のようにです。

その結果、手ぶらの状態で授業に来て、耳で聴いて、今あまり文法を教えませんから、あとから自分でそれなりに意味を理解する。こういうやり方でやっていくときに、学力がどんなふうになってしまうかというのは、私は、非常に懸念しています。とにかく、予習も昔に比べればあまり促さない。宿題も出さないというような状況で、家庭での学習時間というのはかなり減っているようだ。その間、やはり授業についていけなくなって、塾にどうしても行かざるを得なくなっているという状況が今あるんだろうと思います。

そこで学校と塾ということですけども、学校の教師のイメージというのも随分変わってきています。教育の目的として今、三つ挙げました。知識、技能を伝達する。そのときの教師の役割というのは、知識の伝達者であり、それを教える教授者であり、どれだけ身につけているかを評価する評価者である。そして、ちゃんと勉強しているかどうか監督するというようなこともあったと思います。

1980年代ごろから自己学習力の育成ということが随分言われるようになりました。こうなると、子供自身はスポーツで言えばプレーヤーなんですね。で、先生というのはむしろコーチやトレーナーの役割を果たす。子供は授業だけで学ぶというよりは生活全体の中で学んでいく。それが生涯学習力にもつながっていくとなれば、これは高濱先生のお話にもあり

ました、普段の学習の仕方、たとえばノートの取り方、それから教科書の読み方、そういうことなどをきちっとやることによって、より自分で自分の学習をマネジメントしていく。そういう力をつけたいということになります。

最近の教育ですと、総合的な学習あるいは実践的な学習をということになります。すると、教師の役割がコーディネーターとかアドバイザーとか共同学習者とかの役割を果たすというようなことになってきます。私は今の、こういう学習はやっぱり塾より学校を中心にやっていかなくてはいけないのではないかと思います。

しかし、決して知識や技能の伝達が古くなったというわけではありません。そういうこともあってこそ、総合的学習もうまくできる。あるいは、自己学習力です。少なくとも教科の学習については、ある程度やり方をしっかり身に着けたほうが良いということがあると思います。そういうことはきちっと習得する。一応それを習得したうえで、更に自分のやり方を考えていくというような、そういう学習が必要だと思います。

ところが、高濱先生のお話にもあったんですけど、なぜ学校はもっとこれをきちっとやらないんだろうか。どちらかというと、授業の中で知識、技能を獲得させる。あるいは、理解に至らせるということが重きを置かれて、授業が終わってからどう学習していくかということがなかなか注意がいかなかったのではないかな。

私が今、見た感じでは、そこに力を入れているのは一部の塾と通信教育ではないかと思っています。通信教育はとても授業とか、あるいはマン・ツー・マンのような形式でずっと子供を見るわけにいきません。でも成果は上げてほしい。となれば、むしろ普段の自分の学習方法に注目して、それを改善したいということに、今、非常に熱心です。私はむしろそれは本来学校でやるべきではないか。すべての子供に身につけてほしいこととして学校でやるべきではないかと思っています。

最後、それぞれの先生から出たことについて一言二言ずつなんですけれども、高濱先生に関しては、今おっしゃったように塾から見た学校というのがありますけれども、上にあぶれた子、下にあぶれた子。これは私は学校で最近顕著になっていると思います。で、平行四辺形の面積

の求め方のように、教科書開けばすぐに出ている。知っている子はとっくに知っている。それを一応知らないことにしてみんなで考えましょう、あるいは自力で考えましょうということから始める。知っている子にとっては非常に退屈です。分からない子にとっては、これを自分で発見するというのはこれまた大変なこと。

結局、だれかが先に答えを言うてしまうものですから、自分は問題解決をしたという感じに至れない。それをどうするかということですけど、私はそこはストレートに教えたほうがいいと思っています。これは小宮山先生の例を挙げてちょっとお話したいんですが、例えば小数の掛け算。一番上のページにある、2ページの上ですね。「小数の掛け算のやり方を自分で考えてみましょう」というのが、今の特に小学校の研究授業でも多くあるやり方ですし、理想的な授業とされる。指導書にもそういうことが書いてある。私はそれはストレートに教えたほうがいいと思っています。

しかし、教えても意味の分からない子がたくさんいます。教えたことにしてどんどん先に進んでしまったら、単に昔の詰め込みに戻るだけ。教えても分からない子がいるということを前提として、ここで小宮山先生も書いていらっしゃるけれども、こういうやり方を更に丁寧に教える。あるいは自分たちでその意味を考えていくということによって、最初にやり方は与えられたけれども、その深い意味をだんだん理解していくということに、むしろ授業の中心を持っていくべきではないかと思っています。授業のやり方に関し、学校があまりにも自力発見、共同解決ということを経験する導入部からもやり過ぎたのではないかと。私はこれは90年代の反省すべき点だと思っています。そのために、できる子にとっても、学力が低い子にとってもあまり魅力のない授業になってしまったんじゃないか。

それから、小宮山先生も最後に書いていらっしゃいますが、塾に行けない子もたくさんいる。これをどうするかという問題です。学力の格差の問題です。私は二つの方法を、今、実際に提案しています。一つは自治体が塾をやる。例えば、今、土曜スクールというようなことがあります。あれを学校の先生に押し付けるのではなくて、場所は学校を使ってボランティアの先生や市民、あるいは民間の塾の方を雇って、自治体が責任を持って塾をやる。それは地域の子供であればだれでも出られるというようなものにする。

もう一つは、これはむしろ塾の先生方がサービスとして、例えば塾連合が土曜スクールを開きますというようなことをやってくださるといいと思っています。それは恐らく塾の宣伝にもつながるかと思います。その日は無料だけれども、「あそこの先生すごくいいな。あの先生が教えてくれるんだったら、あの塾に行ってみたい」というようなことに使えるのであれば、夏休みとか土曜日、あるいは放課後などに少し塾の先生もそういう貢献をしていただきたい。

そういうシステムがあって初めて学校だけではなかなか補えないことや、また経済力がある子供だけが塾に行つて更に高い学力を着けているという、そういうことが少しでも緩和できるのではないかと思っています。このあたりの可能性とか、ご意見なども伺えればと思っています。以上です。

荻谷 どうもありがとうございました。それでは引き続きまして、ちょっと席を横に取っていただいて、電気もすみません。矢野眞和先生にコメントをお願いします。ではどうぞ、よろしくをお願いします。

矢野 どうも。矢野でございます。大変面白く、勉強になりました。私は塾とか予備校とかいうものに行ったことのない世代で、団塊の世代よりも上であまりよく知らない。大変勉強になりました。同時に、塾というのは私の昔のイメージだと、私より少し若い世代のフリーターを、要するに昔のフリーターを救済する産業が塾だと思っておりましたので、そういう時代から考えると、見事に立派に成長されて感服致しました。この成長の努力に対しては、塾の皆様方の大変な日々の努力があったんだろうと思います。同時にそれは、市場の力というものはそういうものである、ということだというふうに思います。

実は私、この研究会の趣旨、ほとんど知らずに来ております。(笑い) ですから、ちょっと付け足しと思って5分、10分ほどの「塾と学校」というメモを作りました。これは趣旨を全然知らずに作っています。この二つの関係を考えてみました。基本的に軸足、両方とも焦点が異なっているわけで、その違いというものがいったいどこにあるのかということをし少しメモしてみました。副題に書いてあるレトリックは別に気にしなくて結構です。

まず第一に「市場と制度」の比較です。塾が市場で、学校は制度というもので作られていま

す。基本的に市場の特徴というのは何かというと、成功する条件のみ完備しています。この市場の特徴を塾で詳しく説明していると時間もかかりますけれども、「誘引体系の整合性」、インセンティブが一致しているということが重要です。つまり、供給者と需要者のインセンティブが一致しているというのは市場の特徴です。一致していないと市場は成立しない。

成功する条件のみが完備されているのが市場ですので、市場の話は成功した話ばかり出てきます。失敗する話はないことになっています。ですから、成績の伸びる茶髪は話に出てきますけども、伸びない茶髪は出てこない。成功する教師は出てきますけど、失敗する教師は出てきません。失敗する教師は市場にいないからです。そういうふうには市場にある話というのは成功するようになっているんです。失敗した話は市場から退出していくという装置になっている。

需要者と供給者が、同じ動機を持って期待する行動を取るように、インセンティブというのが成立しているわけです。そういうところに市場というものがある。これは塾だけではなくてあらゆる市場がそうです。基本的に備えているのは、教える側が需要によって支えられているわけです。需要は何かというと、お金を払ってでも手に入れたい欲望のことで、この需要によって支えられています。

ですから、塾に行く人はお金を払っている。お金を払ってでも来たい。お金を払っても学びたい人が来ているわけですから、一生懸命学ぶのは当たり前なわけで、ちゃんと教えてくれなければそんな塾には行かないだけの話。

それに比べて制度はどうか。全く違います。まず、誘引体系の整合性がありません。学びたくない人も来てます。本来学ぶ必要のある者はたくさんいるわけだけでも、学ぶ必要のない人に限って、それを学ぼうということを希望しない。希望しない、つまり需要に出てこない人も学ぶ必要がある。そういう理性に従って作られているのが制度です。制度は理性によって成り立っているわけで、需要によって成り立っているわけじゃない。

そういう制度の場においては、学ぶ側、教える側のインセンティブに整合性がありません。例えば大学。学生の講義、授業を行います。授業を「休講」と言ったときに、学生は喜びます。

(笑い) 楽なのは教師です。教師も休講は楽です。学生も休講は楽です。それで一致して授業を休講。休講が最適解でしょうか。(笑い) インセンティブに整合性がないということです。こういう構造をもっているのが制度の特徴です。

2番目は「家族主義と社会主義」です。塾という所は、基本的に子供の教育は親の責任だと考える家族責任主義です。制度は社会主義です。子供の教育は社会の責任だということを前提にして成り立っているわけです。ですから、わが子の教育は親の責任だと思っている親が塾に行かせるわけです。この家族主義が成り立って、教育産業が繁栄しているわけです。

そのことは一見よさそうだけれども、裏を返すと「わが子さえよければいい」ということです。わが子さえよければいいという考えの親が一生懸命お金を払って塾に行かせている。学びたいと思っているわけですから、教えるほうは教えやすいわけです。そこで成功の世界というのが成立するかたちになっています。

しかし、子供の教育は社会の責任だと思います。これ、税金によって社会がサポートして子供たちを教えなければいけないのです。これは親であるかということではなくて、子供を持っていない大人も税金を払っているわけです。これは、子供の教育は社会の責任だと考える社会責任主義によって成り立っている制度だといえます。これもなかなかきれいな考え方です。

理性というのはそういうふうにと考えるときれいなんだけど、病的には無責任体制にもなるわけです。だから、社会の責任主義というのは、病的現象として無責任体制になるわけです。だれが責任取るか分からない。「社会の責任だって。じゃ、どういうふうのだれが責任をとるのか」。そういう犯人さがしの構図になっています。

3番目、「民業と官業の倒錯」。最近では民営化がはやっている。民営化は何を言っているかという、官業が民業を圧迫している。従って、「民にできることは民に任せろ」と言っているわけです。これが今の行政、民営化の話。しかし、教育の民営化は実態どうなっているか。「教育も全部民営化しろ」という意見に私は全く反対しているわけですが、教育を民営化しろと主張する人が増えています。日本の教育の民営化はどういうかたちで起きているかという、実は官業が民業を繁栄させてきたわけです。どこで官が民を圧迫していますか。官業のおかげ

で民業は繁栄している。日本の教育の官と民は倒錯していると思います。

どういうことかということ、日本の学校教育を、改革すれば改革するほど塾は繁栄したわけです。(笑い) つまり塾の繁栄の歴史、1960年、70年、80年の特徴は、学校改革失敗の歴史と全く同じなのです。塾と学校が役割が違うんだというかたちで、学校は役割の違うものを全部切って行って引き算で計算していったんです。そういうかたちになっているので、官業の失敗によって民業が繁栄しているので、私は民に任せるのではなくて、官にできることは官に任せろというふうなふうを考えるのが一番ふさわしいというふうに思います。

それで、最後の4番目「塾と学校のM&A」。で、塾が学校を買収すると仮定すれば、これが民営化になります。私はこれに反対。塾と学校が協力しましょう。この協力は結構だけれども、これは無駄。(笑い) 税金と家計支出の両方を負担するのは無駄です。税金で教育に何兆円払って、塾に一兆円、あるいは二兆円かぐらい。2兆円といたら、国庫負担金に近いです。そのような大金を、家計が塾に払って税金も払ってなんて無駄なことはやめたほうがいい。

税金でできることは税金でやってもらったほうがずっといいです。子供の教育のために使っているお金は、親の文化支出に使ってください。もっと親は文化とか芸術とかコンサートに使ってください。そうすれば新しい文化産業も創出する。そういう意味で、私は学校が塾をM&Aした方がよいと思っています。塾のノウハウを学校が買収する。ノウハウの開発には社会投資をしなきゃいけない。で、徹底的にノウハウを開発するためにもっとお金をかけなきゃいけない。税金もかけなきゃいけない。そのための民間の活力は導入した方がよいかもしれません。

時間が来ました。以上のように、塾と学校というのは大変軸足が異なっている。その軸足の違っているものをはっきりと理解しないとイケない。異なっているけれども、それを、引き算して考えてはイケない。塾でやっていることは学校はやらないとか、そういうふうに考えると、交わることのない双曲線になります。焦点は異なるけれども二つは協力して足して、楕円を描いてください。ということで、それが副題の意味であります。どうも的はずれな・・・。(笑い)

荻谷 どうもありがとうございました。それでは、ちょっと時間がだいぶ押して、この時計が多分5分ぐらい進んでいますので、今、大体40分ぐらいなんです、当初は12時までとい

うふうになっておりますが、大体15分、20分ぐらい、12時15分か20分ぐらいまではちょっと延長させていただくということで、これからの時間はフロアの皆さんを交えて質疑と、それからこのパネラーの皆さん同士のディスカッションの時間に充てたいと思います。

で、途中のご発表のところでの質問の時間を取りませんでしたので、最初にそういった、もしいろいろと基本的な事実の確認とかそういうことでご質問したいことがあれば、最初にそれをまず出していただいて、それにご発表者の方に簡単に答えていただいたあとで、今度はディスカッションに移りたいと思うんですが、何かまずそういった意味での質問があればどうぞ挙手を願います。

で、その際に、今、マイクが回りますが、ご所属をできればお願いしたいと思います。それではどうぞよろしくお願いします。じゃ、そちらの人。はい、お願いします。はい。

I 貴重なお話、ありがとうございます。Iと言います。今、前で話をした高濱の花まる学習会という所で少し講師をして学ばせていただいております。そして、今回ちょっと質問させていただきたいなと思った内容は、ちょっと塾と学校という面からは、ずれるかもしれないんですけども、教育という面で一つ気になっていることがあるので、先輩方にぜひご意見を聞いてみたいなと思って質問をさせていただきました。

そして、私が一つ思ったのは、先程の高濱の話の中でもあったんですけども、父母教育などを含めましてその学校と塾という枠組みの前に、子供の心の問題というかがすごく今重要な局面に来ているのではないかと思っております。というのは、学力を取ってみても何のために学習をするのか、将来どう自分を生かしていきたいのかというところが見えていないために私と同じ世代でも、今、いわゆるニートと言われる人たちがすごく増えてきていると思います。

そして、一つお聞きしたいのが要は大きな志ですね。大志を持っているような子供を育てていくためにはどのような枠組みで今後、塾、また学校がかかわっていけるのかというところをぜひお聞きしたいと思います。よろしくお願ひ致します。

荻谷 どなたっていうリクエストは特にないですか。

I ええ。

苺谷 どなたに聞きたい。

I どなたでも構いません。よろしくお願いします。

矢野 はい。

苺谷 じゃ、矢野先生、お願いします。

矢野 誠に立派な理性だというふうに思います。立派な理性だけで考えると、教育は必ず失敗します。(笑い)

苺谷 ほかに何か。

I もう少し教えていただけるとありがたいんですが。(笑い)

高濱 そうしたら、身内なので、あとで。

I はい。

矢野 ちょっと誤解を与え過ぎてもいけないので、理性は大切に温めてほしいと思います。ただ、そういう勢いでそういう所に行きますと、足をすくわれますので注意いただきたい。できること、目の前のできること、自分ができるところの範囲でものごとを実践していくということが、実は立派な志よりも私は大事だというふうに思っているのです。

苺谷 市川さん。

市川 はい。午後にも少しお話をさせてもらおうかなと思ってはいたんですけども、私は学校と塾がその問題に対してあんまり頑張り過ぎるのはかえって困難ではないかなと思っています。

要するに、社会に出てどんな大人になりたいとか、大人になってああいうふうになりたいと思ったら今どんな勉強をすればいいのか、そういうことをやっぱり肌で感じているのは実際に社会でいろんな仕事に就いている人です。

もちろん、学校の先生もその一つですし、塾の先生もその一つではあると思いますけれども、社会のいろんな人がいろんな考え方を持っているわけですね。そういう社会人とどうかかわるかということがやっぱり私は大事で、せつかく週5日制になったんですし、そこでできた時間にどうやって社会の人とかかわるかです。それは職業生活の面もあるし、いろんな市民生活の面もありますよね。あと、文化生活として地域でのサークルでいろんなスポーツをしたり、何かオーケストラで活動したり。そういうことをやりながら一緒にかかわっていくような場面というのは、私は日本の社会って子供のころから、私が子供のころから少なすぎたなあと思っています。

ですから、何も学校の先生がそういうことを聞き知って教えるとか、塾で生きる目的について塾の先生が語るというよりは、そういう場に自分で参加していけるような仕組みをもっと社会で作っていくと。で、午後にもちょっとそんな話をさせていただきたいと思います。ただ「そういうものがあるから行きなさい」と言うだけでは残念ながら子供たちはあんまり来ないですね。ごく一部の子しか来ない。それが行きやすくなるような仕組み、インセンティブをある程度作っていくということだと思っています。

小宮山 私は、すごく大きな大志っていうのを抱くっていうのは大切だと思うんですけども、私が今まで子供たちに接してきた考えから、例えば理科とか社会とか算数、数学ってありますよね。それは実際子供たちに教えていて、で、その身近なことで「これは社会に出てこういうときに役に立つよ」とか、「これはこういう仕事をするときに役に立つよ」と。「生活するとき、これを知っていると役に立つよ」。小学校の理科とか社会って典型的にそういうものばかりなんですよね、考えてみると。

そうすると、やっぱり大きなものも大切なんだけど、もうちょっとスモールステップで、今、教えていることが、じゃ、どういうふうにして「こういう場面で役に立つよ」というようなちよっ、ちよっ、ちよっって何て言うんですか、具体的に少しずつはめ込むように言って

いけば、そのあとは私は子供とか親が、子供が大きくなって自分で選択していく問題だと思うんですよね。

それを大人がこうあるべきだというような感じで大上段に構えると、子供は多分白けてしましうし、実感としてわからないと思うんですよ。そうすると、私が今までやってきたというのは、例えば理科で言うと、この前ちょっとそういう教材を作ったんですけども、レールの間につながり目がありますよね。間が空いているわけですよ。それはなぜ空いているのかっていうようなこと、これは膨張率の問題だと思うんですけども、で、こういうようなとき、実際そういう場面を見せて、「こういう仕組みでうまくレールが曲がらなくてできているんだよ」と。そうしたら、そういう理論を知って、例えばバイメタル、今技術的にもバイメタルみたいなものを使ってないかもしれないんですけども、そういうような仕組みも分かるわけですよ。

ですから、私はその身近なこと身近なことで子供たちに少しずつ、それがこの所に役に立っているというふうに言っていくのが、われわれ教えるほうとしては必要なことじゃないかなというふうに思っています。

荻谷 よろしいですか。じゃ、ほかにどうぞ。あ、たくさん。じゃ、これもうあれですね。どうしましょう。じゃ、ちょっと真ん中。なるべく答える時間を多く取りたいので、ご質問は簡潔にお願いします。

Y 公立高校教師のYと言います。公教育頑張れということで質問させていただきますけれども、最近の塾もそうなんですが、学校の流れとして非常に面倒見を良くすることがいいんだということで、塾の宣伝なんか面倒見主義とか、1から10まで生徒に面倒見良くやる方がいいような動きがあるんですけども、一方で生徒の考える力とかを逆に奪っているんじゃないかと。僕のころでやってもらってないようなことを、自分らで考えていたことが教師の側から一方的に与えられる。

で、今の高濱さんのお話の父母教育というのも、ちょっと随分親も情けないなというふうに思うぐらい、さっき親が子に過保護だと言いましたけれども、塾が親にこんな過保護なことをやっている自体もおかしなことだなというふうに思うんですが、これが逆に大学行ったときに、

学ぶ意欲っていうんですか、それ五月病なんて言いますよね。奪っているんじゃないかなって
いうふうに思うんですけども、その最近の流れっていうのをどうとらえていらっしゃるか。

塾は経営上、そういうふうにしていかなきゃいけない部分もあるんでしょうけれども、お願
い致します。

荻谷 じゃ、これは高濱先生ですか。はい、お願いします。

矢野 みんなに聞いたほうがいいんじゃないの。

荻谷 ああ、みんなに。

矢野 みんなにまとめて。

荻谷 全員にまず質問を聞きますか。

矢野 うん、時間ないと思う。

荻谷 はい。それじゃ、先程手を挙げられた方、もう1回手を挙げてください。それでは、ち
よっとこっちから順に、じゃ、前の方お願いします。

T 塾をやっていますTと申します。市川先生と小宮山先生に伺いたいんですけど、学ぶこと、
それから子供が学んだことに対する評価、これがどう行われているか。特に塾の場合、進学塾
はある程度分かるんで、補習塾、それから学校の場合は私立学校の場合も成果が問われるんで、
特に公立学校、この二つに絞って補習塾と公立学校2体に絞って、学ぶこと、学んだことに対
する評価。それをどのように行われているか。あるいは、先生方はどう考えていらっしゃるか。
それを教えていただきたいと思います。

荻谷 もう一度、先程の、じゃ、今度は。じゃ、前の方お願いします。

S 学習塾をやっていますSと申します。質問が一つと意見が一つあります。一つは先程、矢

野先生がおっしゃられて、よく私には理解ができなかったんですが、理性によると失敗するという話が出ましたが、それちょっともう少し詳しく教えていただきたいということです。

それから、意見のほう一つなんですけど、塾から見た学校というのは、教師の質は圧倒的に学校のほうが高いというふうに思っています。私どもは教師を800名ほど抱えておりまして、東京23区内のほぼすべての区に教室を出しております。ですから、公立の小・中学校の状況はよく分かっているわけですが、学級崩壊とかそういうことが起きている学校はそれほど多いわけではありません。

それから、学力低位の学校も、公立の中の学力低位の学校もそんなに多いわけではありません。で、学力上位の学校のシステムは、長くなってすみませんが、非常にシラバスもカリキュラムも教材も指導方法も非常に優れています。それは学習塾の比ではではありません。びっくりするほど優れています。これは公立の中学校であります。

そういう中で、でもやっぱり学校に問題はちょっと抱えていることは事実なわけですが、学校のシステム改革をしなくちゃいけないということはあるでしょうし、それと最も一番最初に簡単にできるのは、教員の採用のやり方を全般に変えるべきだというふうに思っています。駄目な教員を採用しておいて、研修したあとから研修して良くなるということは絶対にありませんので、採用の仕方を、非常に高い倍率なんですから、採用の仕方事態がもうはなから間違っているというふうに、受験勉強の延長などで採用しているわけですから、そこに問題があるんだというふうに思っています。以上です。

荻谷 もう1人、こちらの隅。前の方から。はい。

S 1児の母のSと申します。今日は友人に連れられて参りました。非常に勉強になりました。ありがとうございます。質問が二つあるんですけども、まず小宮山先生のお話の中で、レジュメ6の所のマイナス面で、教育の公共性が失われるんじゃないかっていうふうにおっしゃられていて、私はここはそのままずっと最初読み飛ばしたんです。学校が塾のような競争にさらされたら教育の公共性は失われるんじゃないか。

これ、字通りに「学校が」っていう学校という存在が競争にさらされたらっていうことなのか、それとも学校にいる子供たちなのか、学校にいる先生たちが競争にさらされたらなのか、ちょっと分からなくなってしまうと、多分それは先生に教育の公共性という定義がどういうことなのかというのをもう一度伺いすると、すごくすっきりするかなというふうに思っています。質問の一つ目は小宮山先生をお願いします。

もう一つは、高濱先生の所で父母教育という所がありまして、私も塾のビジネスをやるうえで、子供の教育っていうのはイコールお母さん、お父さんの教育なのかなっていうところがすごく意見としては一致しているんですけども、ただ先程あったように「過保護じゃないか」っていうようなご意見があったりとか。その中で矢野先生の中で非常に私の言いたかったことが出てきたのは、その市場であると、塾は。「インセンティブが一致しているでしょう」ってことをおっしゃられたんです。

つまり、高濱先生もおっしゃる通り、塾の先生たちは力がなければやめていかざるを得ない、市場から退出せざるを得ないんですけど、同じように塾というのはお母さんたちも選ばれているところがありますよね。私たちの塾に賛同する、花まるさんのやり方に賛同するので私の息子を預けたいと思うのか、若しくは、うちのポリシーに合っているから花まる先生お願いしますというのか、お母様たちのイメージとその塾なりのイメージが合致しているから預けられるというところもあって、先生方も父母教育できると思うんですね。

だけでも学校というのは、矢野先生がおっしゃっていた通り、とにかく商売が忙しいから子供預かっておいてくれる意味でありがたいお母さんもいらっしゃるかもしれないし、いろんなご家族がいらっしゃるって、いろんな子供さんがいらっしゃる中で、もし矢野先生が言うように、M&Aで学校が塾を買収して高濱先生が学校の中に入り込んだときに、お父さん、お母さんたちに父母教育ってどうやってきっかけ作りとしてやっていけるのか、その辺二つお一人ずつ伺いしたいと思います。

荻谷 じゃ、もう一人、後ろの方。

T すみません。公立高校の教諭です。今、改革が進んでいる所に身を置いているわけですが、

先程の高校と対極といいましょうか、なかなか課題の多い学校という所にずっといるんですが、今までのお話の中にも少し出てきたんですが、われわれの学校も漫然としているわけじゃなくて、さまざまな個別指導をやらないと学校が体をなさないの、家庭にまで入らざるを得ないということが日々日常で、保護者への連絡が付かなかったり、学校へ出てこない、それを呼び出すとか、かなりの努力はしているつもりなんですが、なかなかままならないということで、お聞きしたいのは、われわれのようないわゆる困難校とか、学校が体をなさない、成立しにくい学校。そういう公立高校は決して少なくない数ありますが、そこにくる過程でさまざまなものが欠落させられている。

根本的に特徴的なのは家庭状況が悲惨であるということ。それが集団でいるので、学習以前がほとんどの問題になるんですね。そういう学校が社会的にいろいろな問題をこれから醸し出すというふうに思うんですが、そういう生徒というか、特に問題なのは保護者だと思いますけども、そういう親だとか子供に対して学習塾というものが何か手を出していただける……。もう金もありません、金もないし、子供はもちろん意欲はないし、親も学校から逃げるといような状態が、それは少数ではなくて層としているという所で、学習塾が何か地域を含めて手を貸していただけるような……。

私は協力してできれば一番いいなと思っていますが、何かそういう方法で何かトライされているようなことがあるかと、実際やられているかどうか、やるとしたらこういうこともできるんじゃないかというようなことがもしおありになりましたら、教えていただきたいと思います。

荻谷 それじゃ、ちょっと第1ラウンドはここで。第2ラウンドがあるかどうか分からないんですが、とりあえずここでご質問、ご意見についてはいったん区切りまして、パネラーの皆さんにまずはお答えいただくことに致します。じゃ、どうぞ、どなたからでも。はい、お願いします。

高濱 じゃ、私は父母学校のことに二人の方から質問があったんですが、塾が親に過保護という意見もあると思います、確かに。最初のうちのIさんという方が質問したのにちょっとポイントがずれたかもしれないんですが、若いと思われるかもしれないけど、できることはやっぱり市川先生もおっしゃったけど、現実をきちんと伝えていって、要するに自立に向けてあげ

ることが一番大事であって、それぞれが理念をそれぞれ持つということだと思うんです。

Yさんの話にまずお答えすると、塾は過保護だとして、今の世の中のいろんな問題に一人の市民というか大人として「これでいいのか」ということについて私なりにできる範囲のベストのことをやっているのが今の父母学校。

要するに来てくれる親でいいから、その中のその人たちが自分で「これでいい」と思っていたものが間違っているということに気付いてもらうだけで意味があると思います。実際、10年、12年たって、「あの時に『ほっとけ』って言われたことは本当に役立ちました」ってやっぱり言ってもらえているんです、現実には。

で、それはもう過保護と言えば過保護かもしれないけども、「じゃあ」って言って何もしていないというのはもっと無責任じゃないか。やっぱり社会一つの仕事をして、先生と名の付くことをやるならば、やっぱり効果のあること、効果のあることをやっぱりきちんと自分で追求していたいし、その中の一番、僕はポイントが親への働き掛け。それが一番、子供たちを伸び伸びさせるものとしてやっています。

それで、一児のお母さんという方の質問に答えると、もちろん全員が全員、賛同したという話にはならないと思います。そういうものだと思う。ただ、私が父母学校で言っていることってというのはもう当たり前のことなんです。要するに早起きしろとか、結論としては。

いろいろな家庭内暴力とか、引きこもりとか、リストカットを繰り返す子たちの事例がいっぱいあって、うちは。それで、そもそも精神科医と協力して始めたということがあるので、そういうことから、小さいときに親は「これでいい」と思っているけども、「こういう言葉っていうのは怖いんですよ」っていうふうなことなどを言ってるんです。非常に普遍性がある話しかしていないので、そういうわけで大概来て、聞いてもらえさえすれば、絶対という言い過ぎですけど、非常に反応はいいです。学校なんかで強引にお母さんたちを集めた所に行って話しても、すごく納得してもらえるし、お父さん学級みたいな所に呼ばれても、最初はもうやっぱり「何言ってるんだ、こいつ」っていう顔されても、最後はメモして熱心に聞いてもらえるようになっていて、その辺りは自信はあります。以上です。

小宮山 私のほうは、学ぶことに対する評価ということなんですけども、補習というレベルで考えると、どこに合格したというそういうことはないわけですから、そうすると私は先程もちょっと言いましたけど、そのステップで例えば少しでもいい面が出たら私はほめる。で、ただほめちぎるといのは良くないんですが、ほめるだけだと、「一緒だ」、子供は「また先生、同じこと言ってる」ってことになりますので、私のほめ方としては、前より具体的にどれだけ進歩したかというようなところを見つけてあげて、具体的に示して、例えば「この前は少数のここができなかったけど、今度できるようになったね。大丈夫だよ」というちょっとした進歩をほめてあげるというようなやり方、そういう評価のやり方でやっております。

それから、2番目の「学校が競争にさらされる」ってちょっと時間がなくて、私、あまり言えなかったんですけども、例えば学習塾の大きくなっていく一つの方向ってというのは、私立じゃないんですけども、合格実績ってというのがすごく強いんですね。そうすると合格実績ということを目に出すと、いろんなダーティーなことをやらざるを得ない塾っていっぱいあるわけですよ。

例えば、東京で開成とか麻布に受かっている子たちのは、10年前の話ですけど、ラ・サールとか灘に受けに行くわけですよ、そこが受かっている子が。受かっている子が受けに行くんです。それはどうしてかという、チラシに灘中の合格というのを出したいんですよ。灘中って全国ではその当時一番難しかったですから、そういうことをやってまでして大きくなるっていう塾がやっぱりあるわけですね、現実問題として。どこの塾とはここでは言いませんけども、競争原理に巻き込まれると、結局そういうことになるという恐れがある。

例えば今度の、この前の文科省の大臣が、学力テストで競わせるぞって、私はあれはすごく危険なことだと思うんですね。学校のレベルで競わせる。そうすると、子供もテストのために勉強する。と、親も必死になる。で、教師もそれに巻き込まれるわけですよ。例えば学校で、そのAと言う学校が学力テストで評価が低かったとしたら、「おまえの学校何やってんだ」ってすぐ言われますよ。

そうすると、そのための、じゃ何のための基本的に今までこういうことを、いろんな教育改

革をやってきたかっていうことを、それをまた180度で引っ繰り返っちゃうような感じなんですね。だから、私は、それは学習塾がいかにも成功しているように見えて、その市場原理を導入するというのはそういう意味では反対なんです。

それから、公共性というのは私はあらゆる階層に一定のレベルの知識を与えるのは、これは義務だと思うんです、国の。これは1872年以下、学制以来の私は義務だと思うんです。国がやらなければいけない。で、それをやらなければ市民社会って成り立ちません。社会全体の知的レベルっていうのは高くならなければ、そういう国はどういうふうになるかっていったら最終的にはファシズム、そういうことだって、日本だってまたなるかもしれません。どこの都道府県とは言いませんけども、そういう可能性のある都道府県も出てきているわけですから、教育改革の問題で。で、そういう意味で、私は競争に公教育がさらされるというのは、私としては反対していくつもりです。

それから、あと1点、ちょっとはずれますけども、親の教育ということで出てきたんですけど、私は親の教育をここまでしてあげる必要があるのかと、そういうご質問が出たんですけども、私はしなきゃいけない時代だと思っているんです。それはどうしてかというと、今の親は「何々だから」という発想で親を教育すると、これは必ず反発を受けます。

私の発想というのはどういうことかということ、親も悩んでいるんだ、子育てを。じゃ、なぜ今の親は子育てを悩むのかということ、前の親にそういうことを教えてもらえなかったんですね、基本的に。ですから、例えば江戸時代の教育とか、いろんな民俗学をやっているような方たちの宮本恒一さんですか、あと、柳田國男さんとか、そういうような文献読むと、日本の家庭で子供をしつけているっていう習慣があるっていうのはほんとに一部の階層の人たちだけだったんですよ。8割、9割の人たちっていうのは、家庭でしつけはほとんどなされてなかったんです。そういうのがある程度分かっているんですね。

そうすると、そうした人たちが豊かになって、今の社会になっている。じゃ、子供をどういうふうにしてしつけていいか、子供をどういうふうに育てていいか、こういう大衆消費社会の中で、右往左往して非常に困っている方、そういう階層の人たち多いと思うんですね。で、やっぱり私はそういう意味で時代の今の親は駄目なんじゃなくて、実はもう江戸時代から、

例えば江戸時代のちょっと文献読むと、下級武士の日記なんですけども、ねこかわいがりですよ、子供を。それから、明治の初期のころの外国の日本人の子育てを見たそういう文献を見ると、もう日本人というのは本当に子供をかわいがっている。

最近で有名なのでは「菊と刀」に出ていますよね、ベネディクトの。あそこで一番最初に感心しているのは、日本人というのは子供をすごく大切に。ねこかわいがりしているという。そういうねこかわいがりするってことは、家庭の中での「何々しちゃいけない」という部分のしつけが難しかったっていうのは、私は最近すごく感じています。

じゃ、それはどこでしつけをしていたかっていったら、それは私は今まで農耕文化ってこともあると思うんですけども、地域社会で子供を育ててたっていう力っていうのは、すごく強かったと思うんですよ。で、その地域社会っていうのは完璧に今崩れちゃっていますから、そうすると残った、じゃ、家庭でどういうことをやったらいいかっていったら、家庭のお母さん、お父さん方、もう困っちゃうわけです。そして、そういう私の発想でやっぱり父母の教育というのは、ちょっと高濱先生とちょっと最初の出発点は違いますけども、非常に大切なことだと思いました。

市川 じゃ、私のほうから二つ、ちょっとお答えしておこうかなと思います。一つは親に対してだけじゃなくて、子供にも手を掛け過ぎではないかというようなご意見あると思うんですね。要するに過保護じゃないか。で、ただ教育の目標というのはやっぱり自立を促すといいますか、最終的に自ら学び自ら考えるというような状態になってほしいと。

ただ、なってほしいというのは、あくまでも最終的にそうなってほしいというのであって、プロセスにおいて「じゃ、自分でやりなさい」と言っているだけで、そういう力がつくというふうには恐らく皆さんもお考えにならないと思うんです。どっかの時点で何らかの手を掛けないとなかなか子供は育っていかない。

問題は何をどれくらい手を掛けるかっていうことだと思うんですよ。日本の教育がどちらかということ、内容的なことを一生懸命教えるということに相当のエネルギーを割いていた。それがむしろ、教えられないと学べないという子供を育ててきたんじゃないかという反省がある

と思います。

ですから、私はむしろ、よく魚を与えるのか、魚の釣り方を与えるのかという例で言われま
すけれども、その釣り方に当たる部分っていうのは大事だなと。それから、釣ってみたいとい
う気持ちを持たせていくこと。これが大事だろうと思います。

具体的に言いますと、多分、二つのことが過保護と言われるかもしれないです。一つは宿題
なんですね。宿題なんか出されなくても自分で学ぶ子を育てたいので、「家では自発的にやるも
のだよ」と言う。「宿題はもう出さない方針です」と言って、自発的に学ぶようになるかとい
うと、残念ながらなかなかそれは起きない。

私は、小学校の低学年から全く宿題を出されないという子はかわいそうだと思います。家庭
学習というのはどういうやり方で、どれくらいのことをやるのがいいのかっていうことがさっ
ぱり分からないまま高学年になって、中学生、高校生になっている。すると、定期テストがあ
れば我流で何かやるわけですが、どうもやり方が良くないので、結局成績にも結び付かない。
自分は頭が悪いんじゃないだろうか、駄目なんじゃないかということで意欲もなくしてしまう。

宿題というのは初めのうち出されることによって、むしろ宿題を出されなくてもやるという
子が育つんだろうと思います。ですから、最初はこんなふうなことをやるといいよと先生が宿
題として与える。しかし、その次はだんだん自分で計画を立ててやれるように持っていくと。
それが自立を育てることになると思うんです。

それからもう一つは、学習法なんですね。「学習法なんて昔はみんな自分で考えてやっていた
よ」とおっしゃる方、多いと思います。特に先生はそうだと思います。ある程度、勉強が好き
で良くできたという方はみんなそんなことぐらいやっていたと。今の子供は意欲が低いことも
あって、驚くほど学習法に工夫をしないんですね。非常に形骸的なやり方でやって、「やっても
できません」というようなことであきらめてしまう。

そういう子供には少し後押しする意味で、「例えばこんなやり方でやってみるとどうかな」と
いうような経験をしてもらうこと。それによって、やり方しだいで自分も随分できるようにな

るんだってというような気持ちを持ってもらうことというのは、今の時代、非常に大事だと思います。それが自信にもつながって、自分でもその先やっていけるということになっていく。

ですから、やっぱり昔と状況が違うと思うんですね。それだけ全体的な興味、関心、意欲が勉強に向かわなくなっている時代に、ある程度のことをすることによって、むしろ最終的には自ら学び、自ら考えるというようなことが育っていくんだと思います。

それからもう一つ、公立学校では子供が学んだことに対する評価がどのように行われているかということですね。やはり私たちの時代とは随分違った傾向が出ていると思います。で、これはまた塾とも違うかなと思います。いわゆる絶対評価、到達度評価というようなかたちで、昔の相対評価による評定、それからテストの点数だけというようなことではなくなって、どういことができるか、どういうことがまだ不十分かということをきめ細かく評価するという傾向が一つ。

もう一つの傾向は、もっと自分の学習のプロセスとか成長を自分で見て取ることができるよというよなことで学ぶプロセスをファイリングして行って、ポートフォリオというよなかたちにして自己評価すると。そこに先生もアドバイスをを入れていく。それから、何かの活動をするよ子供同士での相互評価とか、そういう視点もあるんだってことをほかの子供たちからとり入れることよって学習の改善を図るような方向も出ています。

やっぱり評価というのは学習改善のためにするべきものよから、先生から通知票をもらって一喜一憂しているようだけではなかなか学習の改善に結び付かない。そういう意味で学校教育の中ではそういうかたちの新しい評価をして、学習の改善に結び付けたいような努力がかなりなされつつあるよところですよ。塾でも学習改善に結び付く評価ようことは考えていらっしやると思いますがけれども、学校はポートフォリオであるよか、自己評価よかいうかたちでやろようとしているようのが特徴かなと思います。

苅谷 矢野先生、お願いします。

矢野 理性的な皆様がお集まりのようで。(笑い) 私のは刺激的過ぎるのよしょうか。皆さんも

私も理想的な社会であってほしいと思っております。そのときに、現実というものをよく見て、やっぱり考えないといけないんじゃないかということ、私は日々感じているわけです。学校教育は私は非常に大事だと思っておりますけれども、同時に子供の教育というのは社会の責任であるからして、税金を投入して、未来の日本をしょってくれる人を育てないといけない。

それにはお金を投入しないとイケないわけです。学ぶ教え方が塾の教え方が上手だという現実を考えれば、学校はやはり教育方法を改善しないとイケない。

これに対しては、教員の数だって改善しなければいけないわけでしょう。そういう学びにくい子供たちにもものを教えていくというときには、今のお金より倍ぐらいかかるわけだ。それに対して「社会が税金を出しましょう」という気持ちになるかならないか。気持ちになるのが理性。そういうふうにならない理性というのでは、実践的な力にならないわけです。

従って、必ずそういう理性というものの言葉に捕らわれていて、現実との距離というものを忘れると、失敗というものがぼろぼろぼろぼろ出てくるんだと。従って、社会の責任として子供を育てるには、さまざまな教材の開発、もっとどんどんどんどん、税金を投入して子供のためにいろいろ面白い教材をどう作るのか。これにお金を使うということを私が市長だったら必ずそうしますけれども、そういうことをやって目に見えるようにして、その自分の理想なり理性というものを実現するノウハウにお金をかけなければいけない。

そこまで立ち入って議論しないとイケないわけで、で、市場のノウハウというものは、お金が投入され、膨大な投資されて開発されていくものですから、私は極端にM&Aと言ってますけれども、そういうノウハウをどんどんどんどん公教育に投入していく。そういう意味合いです。まだつづきがあるんですけど。(笑い)

荻谷 ちょうど時間となりました。(笑い) 20分になってしまいました。第1ラウンドでフロアからのご意見、ご質問はこれで終わらせていただきますが、多分皆さんそれぞれもってご発言なさりたい方、それからご質問なされたい方もいらっしゃると思います。ここで私が最後にまとめるようなことはしませんけれども、今日のタイトルは「塾から見た学校」ということなんですけど、「じゃ、学校は塾をどう見てるのかな」なんていうことについても、もうひとつや

っぱり、ある意味では塾のほうは非常にそこら辺のところを鋭く厳しく見ているのかもしれませんが、ある意味では学校から見た塾というのは、非常にステレオタイプとしてしか見てないということがあるのかなんてこともお話を伺いながら感じました。

更に、本当に塾にできて学校にできないっていうのはそれなりにたくさんあるというご指摘があったんですが、でも、そこにはやはり学校にはできないそれなりの理由がある。その理由は何なのかという矢野先生のお話にも多分そういうことがたくさん出てきたと思いますけれども、その辺もやっぱり考えていくところからまさに楯円になるような、そういう、でも東大の教育学研究科の主催する公開研究会で、塾と学校が楯円になるなんてことが言われるようになったこと自体、私は画期的なことじゃないかと思います。(笑い)

で、もう時間が来ましたのでこれで閉じさせていただきますけれども、2点だけお知らせがあります。一つは、今日のこの公開研究会の記録を臨床センターの年報にまとめさせていただきます。それから、そこではじゅうぶん、テーマベースなのですべての議論を紹介できないと思いますが、それとは別に機構のホームページにも今日の記録は載せさせていただきたいと思っています。

それで、フロアからご発言いただいた分につきましては、もしお差し支えがあればお名前は出さないで、お立場だけは、学校名とかは出さないかもしれませんが、一応そういう質問というかたちでホームページ上では紹介させていただくことがあるかもしれませんので、もしお差し障りがある方は、ご発言なさった方で、後程言ってくださいと思います。

それから、もう1点、これはアナウンスメントですけれども、教育研究創発機構の中には基礎学力研究開発センター、COEと呼ばれるグループ組織があります。今日このあと、方角的にはちょうどこの奥に当たるんですが、鉄門記念講堂と言う所で、午後1時半から、「日本の基礎学力、現状と展望」ということで、公開の研究会があります。これもどなたでもご参加できますので、もし今日いらした方で、お昼ご飯食べたあともう少し時間があるという方は、ぜひ鉄門記念講堂のほうにいらしてください。

それからこのシンポジウムは明日も、「この」というのは基礎学力研究開発センターのほうで

すが、「日本の基礎学力、現状と展望」、明日もあります。明日は朝の9時半から午前中やはり同じ鉄門記念講堂でCOEのシンポジウムがあります。それも併せてご参加いただければと思います。

今日は本当に時間的にも空間的にも大変タイトな中で、でもその分、充実した時間が過ごせたんじゃないかと思います。本当に皆様、ご参加いただきましてありがとうございました。これにてじゃあ。(拍手)

(終了)